

「死をめぐる自己啓発本」出版史

尾崎 俊介

死の恐ろしさ

人間に関する種々様々な真実の内、最も厳粛にして最も普遍的なのは、「人は誰でも必ず死ぬ」ということだろう。今から4万年ほど前、ネアンデルタール人が死者を埋葬する際、墓所に花を敷き詰めていたことが遺跡調査によって明らかにされているが、そうした事実からも人類がそのごく初期の段階から「死」というものを厳粛に、かつ強い関心をもって受け止めていたことが窺われる。¹

当たり前のことではあるが、死についての最大の問題は、それが何人にとっても不可避な経験であるということである。社会的身分が高ければ死を回避できるというものではなく、お金があれば無際限に死を遠ざけられるというものでもない。また死とは自分自身が無になることであり、それは他の諸経験とは比較にならないほど恐ろしい予感である。しかも自分が無になるという状況を想像すると、それに付随する種々の事柄、例えば自分の愛する家族や友人たちの輪から自分だけが脱落するという無念さや、それまでのキャリアの中で築いてきた社会的地位及び財産が（少なくとも自分自身にとっては）その価値を失うことなどが想起され、そのことがもたらす圧倒的な空虚感がその人をして深刻な虚脱状態に陥らせることにもなる。

そしてこれら一連のことを「自己啓発本」との関わりで捉えるならば、社会的身分を向上させる、もしくは金持ちになることを指南する類の自己啓発本は、それを指針としてきた本人が死期を悟った時点でとりあえず効力を失う、ということでもある。

となると、自らの死に直面している人間にとって必要なのは、それまでの自分を支えてくれた自己啓発本とはまた別の種類の自己啓発本であるに違い

ない。では、そんな自己啓発本——それは「死をめぐる自己啓発本」と呼ぶべきものであろうが——は存在するのだろうか、また存在するのだとすれば、それはいかなるものであり得るのだろうか。

達観法

自己啓発本の歴史を繙けば、それが死という人生最大の難関を克服するための、幾つかの方法を提示してきたことが明らかになる。

例えばそうした死をめぐる自己啓発本の一つの形として、「死が持つ破壊的な側面を否定、ないし軽視する」という類の自己啓発本がある。死はいずれ誰の元にも訪れる自然なものであるから、そのことを考えて気に病むのは無駄である、と教え諭す一連の自己啓発本がそれである。本稿では仮にこの種の自己啓発本を「達観法」に基づく自己啓発本と呼ぶことにする。

ではそんな達観法的自己啓発本にはどのようなものがあるのだろうか。

達観法に基づく自己啓発本の典型的な、かつ最も初期の例を挙げるとするならば、まずは古代ギリシャの哲学者エピクロス（Epicurus, 341-270BC）の手になる「メノイケウス宛の手紙」²を挙げなくてはならない。この手紙の中でエピクロスは、死を恐れることの無意味さを次のように指摘する：

死は、もろもろの悪いもののうちで最も恐ろしいものとされているが、じつはわれわれにとって何ものでもないのである。なぜかといえば、われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである。そこで、死は、生きているものにも、すでに死んだものにも、かわりがない。(67-8)

人は生存している限り死とは無関係であり、死んだ時には既に自分自身がないのだから、人が死と直接対峙することはない、ゆえに人は死を恐れる必要がない——このようなエピクロスの死生観は、一見すると単なる言葉遊び、あるいは詭弁のようにも見える。だが、ここで快樂主義者エピクロスが主張していることは、いつ訪れるとも知れぬ自らの死を気に病むことなく、与えられた人生を精一杯生きよということであり、それはミハイ・チクセン

トミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi, 1934-2021) の「フロー理論」に代表される現代の「ポジティブ心理学」³ や、あるいは仏教系自己啓発思想として近年盛んに提唱されている「マインドフルネス」⁴ が異口同音に提唱する『今、ここ』に集中して生きよ」という教えを先取りしたものとも言え、決して不真面目なものでも意味のないものでもない。

さて、このように達観法を用いた死の恐怖への対処法は古代ギリシャの昔から存在しているわけだが、この系統の自己啓発本の中で最も格調高いものと言え、何と言っても第 16 代ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌス (Marcus Aurelius Antoninus, 121-180) の書いた『自省録』⁵ に止を刺す。

本書の中でマルクス・アウレリウスは、人間の生と死について次のように述べる：

一言にしていえば、肉体に関するすべては流れであり、靈魂に関するすべては夢であり煙である。人生は戦いであり、旅のやどりであり、死後の名声は忘却にすぎない。しからば我々を導きうるものはなんであろうか。一つ、ただ一つ、哲学である。それはすなわち内なるダイモーン (論者註：各人の心中に備わる指導的精霊のこと) を守り、これの損なわれぬように、傷つけられぬように、また快樂と苦痛を統御しうるように保つことにあ
る。またなにごとでもたためにおこなわず、なにごとでも偽りや偽善を以て
なさず、他人がなにをしようとしまいとかまわぬよう、あらゆる出来事や
自己に与えられている分は、自分自身の由来するのと同じところから来
るものとして、喜んでこれを受け入れるよう、なににもまして死を安ら
かな心で待ち、これは各生物を構成する要素が解体するにすぎないものと
見なすように保つことにある。もし個々のものが絶えず別のものに變化
することが、これらの要素自体にとって少しも恐るべきことでないなら
ば、なぜ我々が万物の變化と解体とを恐れようか。それは自然によること
なのだ。自然によることには悪いことは一つもないのである。(33-4、傍
点論者)

ここでローマ皇帝が提唱しているのは、端的に言えば、死のような自然現象について思い悩んでも仕方がない、ということである。なぜなら、「もし神々が私について、また私に起るべきことについて協議したとするならば、必ず賢い協議をした」(110) はずであり、仮に「神々が特に個人的に私について協議しなかったとしても、とにかく宇宙のことについては協議したのであるから、私に起ることもその結果として生ずること」(110) なのであって、そうした宇宙の仕組みの中で所与のものとして与えられた死という運命に対し、人間が不満を抱く筋いはいないからだ。人が生きている間にすべきこととは「目前の仕事を正しい理性に従って熱心に、力強く、親切におこない、決して片手間仕事のようにやらず、自分のダイモンを今すぐにもお返ししなくてはならないかのように潔くたもつ」(45) こと以外の何ものでもなく、そのように心がけた上で、「何ものをも待たず、何ものをも避けず、自然に適った現在の活動に満足し、ものをいう場合にはいにしえの英雄時代のような真実をもって語ることに満足するならば、君は幸福な人生を送るであろう。誰一人それを阻みうる者はない」(45-6)。——これがマルクス・アウレリウスの死生観であり、死の影に怯える我々現代人を励ますローマ皇帝からのアドバイスなのである。実際、ストア派の哲人でもあったマルクス・アウレリウスは、この言葉通りに自らの生をストイックに生き抜いたのだった。

死の恐怖を克服するための自己啓発思想の一形態である達観法は、ギリシャ・ローマ時代に留まることなく、その後、現代に至るまで連綿として受け継がれている。例えば 20 世紀半ばのアメリカの神学者ラインホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr, 1892-1971) による有名な「ニーバーの誓い」(Serenity Prayer)⁶ もその一例で、「神よ、変えることのできないものを静穏に受け入れる力を与えてください。変えるべきものを変える勇気を、そして変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えて下さい」というその祈りは、身に降りかかる運命を静穏に受け入れることを促している点で、ギリシャ・ローマ起源の達観法の現代版と言っていい。なお「ニーバーの誓い」は、もともとアルコール依存症患者の自立支援組織である「アルコホーリクス・アノニマス」(Alcoholics Anonymous) の内部で、あるいは常に戦死の可能性に晒されている米軍兵士たちの間で盛んに唱えられたものだ

が、後にそうした特殊集団の外部にも広く知られるようになり、いつしか 20 世紀半ばを代表する自己啓発的格言となったのだった。

ちなみに、達観法に従って現代社会を生きるとは具体的にはどういうことか、それをよく表している事例として各種自己啓発本の中でしばしば紹介されるのが、映画『その男ゾルバ』(1964)⁷の主人公ゾルバである。辛い過去や先行きの不安に苛まれることなく、人生を常に今この瞬間に捉え、生きる喜びを堪能し尽くそうとするゾルバの生き方は、確かにエピクロスの(=ギリシャ的)快樂主義の体现であり、本作の原題が『ギリシャ人ゾルバ』(*Zorba the Greek*)であることも意味深く思われる。

魂不滅説

とはいえ、誰もがエピクロスやマルクス・アウレリウスやニーバーのように、あるいはゾルバのように、ストイックで達観した、もしくは極度に楽観的な死生観を持てるわけではない。動物のように端から理性を持たないのであれば別、一方で神のごとき精神性を備えながら、他方、その精神性が肉体という容器に入られているがゆえにいずれ崩壊しなければならない、そんなアンビヴァレントな存在である人間にとって、死が言いようのない不安と懊悩の根源となっていることは、アメリカの文化人類学者アーネスト・ベッカー(Ernest Becker, 1924-74)が主著『死の拒絶』(*The Denial of Death*, 1974)で指摘している通りである。⁸となれば、「死んで無になることは避けがたいことであるから、そのことに懊悩するのは無駄」とする達観法の解決法によって十分な慰めを得られない多くの人々には、それとはまた別の系統の死をめぐる自己啓発本(ないし、その前提となる自己啓発思想)が必要となることは言うまでもない。

そしてその別系統の死をめぐる自己啓発思想は、人の死を自然なものとして見做す達観法とは異なり、死という現象そのものを否定する——すなわち「人間の魂は不滅であり、ゆえに死というものは存在せず、それを恐れる必要もない」と主張する——思想として登場する。本稿ではこの種の死をめぐる自己啓発思想を、「魂不滅説」と名付けておく。

魂不滅説の考え方は、先の達観法と同じく、起源を尋ねれば古代ギリシャ

にまで遡る。例えばかのソクラテス (Socrates, 470-399BC) は、その代表的な主張者の一人である。

ソクラテスは、魂不滅説に基づき、自らの死を恐れなかったばかりか、むしろ死ぬことに大きな期待すらかけていた。プラトンの『パイドン』⁹によると、詭弁を弄し信奉者たちを墮落させた罪によって死刑を宣告されていたソクラテスは、処刑を待つ投獄期間中はもちろん、処刑当日に至っても平然といつも通り弟子たちとの対話を続け、彼との別れを嘆く弟子たちを励まししながら、死にゆくことについての自らの心境を雄弁に語ったという。

ソクラテスの推論では、小さな種から大きな樫の木が生まれるように、物事は正反対のものから生起する。よって生から死が生まれるように、死から生が生まれることは疑い得ない (相互生起説)。また人間には生まれつきの知恵や判断力が備わっており、学習とは新たに学ぶことではなく、既に知っていることを思い出すことの謂いであることからして (想起説)、人間の魂が不滅であり、何度も生まれ変わりを経験していることは明らかである (魂不滅説)。つまり人間の死とは一時的に肉体を脱ぎ捨てることに過ぎず、となれば、類似するものは互いに惹かれ合うのだから、肉体の制約を脱した純粋な精神は、同じく純粋なものである叡智にまっすぐ向かうに違いない (類似説)。ゆえに叡智を希求する哲学者にとって死は恐れるべきものではなく、むしろ歓迎すべきものであって、この世にある時から日夜「死の練習」を積みながら心待ちすべきものである——これがソクラテスの死に対する確固とした認識であり、この言葉通り、ソクラテスは時至ってもいささかも動ずることなく肅々と毒杯をあおったのだった。

1848 年を揺るがした二つの「ボルターガイスト」

このように魂不滅説の起源は達観法のそれと同様に古いのだが、この考え方は 18 世紀を境に一旦途絶える。現生と死後の世界の間を自由に行き来し、天国と地獄の在り様を自らの目で確かめてそれを詳細に報告したスウェーデンの科学者／神学者エマニュエル・スウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772)¹⁰ のような特殊な例外こそあれ、合理主義の発達、及び近代科学・近代医学の発展に伴って人間の死の不可逆性が明確になるに

つれ、「人間の魂は不滅である」という神話的言説はその信憑性を失ったからである。

ところが 1848 年という年、イギリスとアメリカで「ポルターガイスト現象」(家の中の事物が霊の振る舞いによって勝手に動き出す現象)をめぐる言説が同時発生的に生じ、これを契機として魂不滅説が再浮上することとなる。

まずイギリスでの事情について述べると、この年イギリスではキャサリン・クロウ (Catherine Crowe, 1807-76) という作家の『自然の夜の側』(*The Night-Side of Nature*)¹¹ という本が出版され、大きな話題となった。この本はヨーロッパ各地から採録した心霊現象の実話集なのだが、ここに収録されたポルターガイスト現象 (ちなみに「*poltergeist*」というドイツ語が英語圏に普及したのは、この本の中でこの語が紹介されたことによる) の記録は、この世のものならぬ世界の存在を証するものと考えられ、この本がベストセラーとなったことで、この世とは別次元の世界 (= 死者の住む世界) があるのではないか、という噂がイギリス中に広まり、これを発端として時ならぬ心霊ブームが巻き起こるのである。これは、大まかに言えば魂不滅説の再興と見做し得るが、ソクラテスの (思索的帰結としての) 魂不滅説と区別するために、ここでは「死後生存説」と呼ぶことにする。

だがここで興味深いのは、死後生存にまつわる言説がイギリスを席捲したのと同時期に、アメリカにおいても同様の言説が生じた、ということである。と言うのも、イギリスでポルターガイスト現象についての過去の実話が話題になっていた 1848 年、アメリカではまさにそのポルターガイスト現象が、現実の出来事として、人々の眼前で生じたのだ。その出来事とは、フォックス家の姉妹 (Margaretta Fox, 1833-93 & Catharine Fox, 1837-92) を主人公とする一連の騒動を指す。¹²

後に「ハイズヴィル事件」(Hydesville events) と呼ばれるようになるこの出来事は、1848 年 3 月 31 日、ニューヨーク北部にある小村ハイズヴィルに住んでいたフォックス家において、夜、トントンと木を叩くような音 (ラップ音) が聞こえ出したことから始まった。フォックス家の次女マーガレッタと三女キャサリンは、このラップ音があの世の霊からの通信ではないかと考え、この音の主に向かってこちらの質問に「yes」なら一回のラップ音、「no」

なら無音で返答をするという形で交信を試み、その結果、この音を鳴らしていたのは「チャールズ・ロズナ」(Charles B. Rosna)という行商人の霊であったことが判明する。ロズナの霊があゝの世から訴えてきたところによれば、彼は5年前までこの家に住んでいたジョン・ベルという男に刺殺されて地下に埋められ、持ち金の500ドルを奪われたのだという。そこで家の地下を掘ってみたところ、実際にロズナのものと思しき少量の骨と髪の毛が出土したため、フォックス家の姉妹が霊との交信に成功したという噂は、たちまち全米の知るところとなった。

無論、地下から掘り出された骨と髪の毛が本当に殺された男のものであるかどうかは明らかではなく、ラップ音そのものも含め、すべてはフォックス姉妹の悪戯であった可能性は高い。だが、それにも拘わらず、「ラップ音を使って死んだ男の霊と交信することができた」という噂が瞬く間に全米に広まったことには、歴とした理由があった。実はハイズヴィル事件に4年ほど先立つ1844年、当時として最先端の科学技術である「モールス信号」による送受信が実現していたのである。「トン・ツー」の組み合わせによる夢の遠距離通信——いわばラップ音を使った遠距離通信——が実現したとなれば、人々がモールス信号からの類推により、件のフォックス姉妹が「ラップ音によって『あの世』と『この世』の遠距離通信に成功した」と考えたとしても不思議ではない。つまりハイズヴィル事件が引き起こしたアメリカの心霊ブームは、心霊現象と最先端科学の成果が類推的に結びついたところから発生していた点において、それ以前の単なるオカルト的な心霊ブームとは一線を画すものだったのである。そしてそのことはまた、「通信ができる以上、死者が赴く『あの世』は実際に存在するに違いない」というもう一つの類推を促すものであり、死によって己が無になることの恐怖に怯える多くの人々にとっては、死後生存があり得ることの証として、大いなる福音となった。その意味でハイズヴィル事件とは、極めて自己啓発的な色合いを持った「噂」だったのだ。この事件が19世紀半ばのアメリカでなぜそれほど大きな反響を引き起こしたのか、その理由はまさにここにある。

実際、ハイズヴィル事件の余韻は大きかった。著名な興行師であったP・T・バーナム(Phineas Taylor Barnum, 1810-91)は、目ざとくもこの事件

にビジネス・チャンスを見てとるや、フォックス姉妹を「バーナムのアメリカ博物館」に招き、「あの世と交信した姉妹」と喧伝してアメリカにおける死後生存説ブームを煽った。事実、ジェイムズ・フェニモア・クーパーやウィリアム・カレン・ブライアント、ホレス・グリーリーなど、当時のアメリカ文壇の大御所たちもフォックス姉妹にまつわる心霊現象に大いなる関心を示し、バーナムの博物館に押し寄せたという。¹³ そして一旦火のついたこのブームは留まるところを知らず、19世紀後半のアメリカには死者との交信を請け負う自称「霊媒師」が多数現れ、それらの霊媒師を介して死者の霊と交流する交霊会——呼び出された霊がテーブルを動かして存在を知らせるため、「テーブル・トーキング」とも呼ばれた——が大流行した他、アメリカ版こっくりさんとも言うべき「ウィジャボード」(oui-ja board)が飛ぶように売れた。またフォックス姉妹に続いてニューヨークの田舎から出てきたダヴェンポート兄弟 (Ira Erastus Davenport, 1839-1911 & William Henry Davenport, 1841-77) は、ロープで手足をきつく縛られ、狭いキャビネットに押し込められた状態で、呼び出した霊を操って楽器を弾くという新たな心霊ショーを考案、フォックス姉妹に劣らぬ人気を博すこととなった。ハーヴァード大学の教授たちが躍起になって調査しても種明かしができなかったダヴェンポート兄弟のキャビネット芸は、後に脱出マジックで名を上げる不世出の魔術師ハリー・フーディーニ (Harry Houdini, 1874-1926) に伝授されることにもなるのだが、¹⁴ かくのごとくアメリカにおける死後生存説は、多分に見世物的な側面を含みながら、大衆の間に広まっていったのである。

一方、アメリカで話題を呼んだ交霊会は、大西洋を越えてイギリスでも大流行する。その流行ぶりは、王立研究所の科学者マイケル・ファラデー (Michael Faraday, 1791-1867) ——名著『ロウソクの科学』で知られるあのファラデー——をして 1853 年、交霊会を主催する霊媒師がいかにして参加者に気づかれずにテーブルを動かしているか、そのトリックを科学的に暴露する記事を『タイムズ』紙に投稿させるほど、一部の人々にとっては苦々しいものであったが、¹⁵ この程度の冷や水ではイギリスに蔓延した死後生存説ブームの火を消すには足りなかった。というのも、当時彼の地には D・D・ヒューム (Daniel Dunglas Home, 1833-86) なる天才霊媒師が現れ、決して

見破れないテーブル・トーキングのトリックで人々——その中には詩人のロバート・ブラウニングや後述する物理学者ウィリアム・クルックスなど高名な人士も数多く含まれる——を魅了していたからである。¹⁶ なおヒュームは後にロシアに渡り、ロシア皇帝の名づけ子と結婚するが、その時のヒュームの付き添いは、かの文豪アレクサンドル・デュマだったというのだから、当時名のある霊媒師の人氣がいかにかにすさまじかったかが窺われる。¹⁷

心靈ブームのその先：ブラヴァツキー夫人の「神智学協会」

かくして、科学的裏付けがある（かのように見える）現象、あるいは科学者ですらそれが詐欺であることを立証できない（ゆえに科学者が間接的にその信憑性を立証することにもなった）現象としての死後生存説ブームは、19世紀後半から末頃にかけての英米両国を中心に、もはや一つの思想的潮流と呼んでも良いようなものとなっていく。そして死後生存説が思想的潮流へと変貌する契機の一つとなったのは、稀代の詐欺師ヘレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー（Helena Petrovna Blavatsky, 1831-91）、通称「ブラヴァツキー夫人」の存在であった。¹⁸

ブラヴァツキー夫人の前半生は、実際のところ、ほとんど何も分かっていない。インドやエジプト、ロンドンやパリ、果ては日本にも滞在したと自伝に述べているものの、確証となるものはない。ただ自称するところでは、7年間をチベットで過ごし、導師たちから密教系の仏教を学んだとのことで、その辺りの厳密な事実関係はともかく、少なくともいずれかの時点で聞き及んだであろう仏教の知識が、後の彼女の教義の根幹をなしたことは推測できる。またアメリカに進出する以前には、パリにおいて先に名を挙げた天才霊媒師D・D・ヒュームの弟子となり、彼女自身優秀な霊媒師として頭角を現した他、催眠術や水晶占い、体外離脱の方法などを会得し、さらにフリーメーソンのメンバーとの交流を通じて秘密結社の様態まで学んだという。そして1873年、満を持してニューヨーク入りしたブラヴァツキー夫人は、当地で盛んに行われていた交霊会に参加しながら時を待ち、やがて1875年、交霊会を通じて知り合ったヘンリー・スティール・オルコット大佐（Henry Steel Olcott, 1832-1907）——元陸軍軍人にして独自の仏教思想を持つ思想家——を初代

会長に推し立てて多分にオカルト的、ないし秘密結社的なところのある「神智学協会」(The Theosophical Society)を設立する。

と、このように述べてくれば、ブラヴァツキー夫人なる人物の詐欺性は明らかであり、実際、後述するイギリスの「心霊現象研究会」によって彼女の霊媒師としての活動がすべてトリックであったことは暴露されるのだが¹⁹、それにも拘わらず、彼女が設立した「神智学協会」は多くの支持者を集め、ブラヴァツキー夫人の思想もまた、その後末永く大きな影響力を振るうこととなる。

神智学協会を通じて、また自ら著わした『ベールをとったイシス』(*Isis Unveiled: A Master-Key to the Mysteries of Ancient and Modern Science and Theology*, 1877)などの著書を通じてブラヴァツキー夫人が主張したのは、端的に言えば「霊性進化論」とも言うべき思想である。彼女の思想体系においては、霊こそが人間の本体であり、この霊をより高度なものに進化させ、最終的には「神人」に至るために人間は輪廻転生を繰り返すものとされた。無論、これは 19 世紀後半の西欧社会を揺るがしたダーウィンの進化論からの派生思想であると考えられるが、それを語るブラヴァツキー夫人一流の難解なレトリックは、オカルト的思想を当時の最先端の科学的言説に絡めて煙に巻くような類のものであったとはいえ、それが人間の霊魂の不滅と進化を説いていた点において、「(教会が口を閉ざす) 未知の霊的世界」や「(科学が未だ説明し得ない) 人間の霊能力」への関心が高まっていた 19 世紀末の英米両国の社会風潮に極めてよく合致したのである。

しかもブラヴァツキー夫人の強い影響力は、彼女の死後も長く尾を引いた。夫人が 1891 年に他界した後、神智学協会はインドのアディアルに本拠を置くアニー・ベサント (Annie Wood Besant, 1847-1933)²⁰ 派と、アメリカ・サンディエゴのロマ岬に本拠を置くキャサリン・ティングリー (Katharine Tingley, 1847-1929)²¹ 派に分裂したものの、アニー・ベサントはその後、インドで発掘した孤児ジッドウ・クリシュナムルティ (Jiddu Krishnamurti, 1895-1986) を救世主に据えた「東方の星教団」を設立しつつ、ガンジーらと共にインド独立に尽力し、一方のキャサリン・ティングリーの膝下からはウォルター・エヴァンス=ヴェンツ (Walter Evans-Wentz, 1878-1965) なる異

能が出て、人間が死後に赴く「バルドゥ」(＝中宥・中間生)の在り様や、その後の「輪廻転生」について詳細に記したチベット仏教の経典『チベットの死者の書』を英訳する大業を果たした。この本はヴェンツの英訳を元にさらにヨーロッパ諸言語に翻訳され、オーストリアの精神科医カール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) の思想に大きな刺激を与えたことでも知られているが、²² そのユングの同国人／同時代人であるルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) もまた、1902 年から「神智学協会ドイツ支部」の支部長を務めた他、教育家として「輪廻転生」を踏まえた特異な教育方法を実践するなど、神智学の影響を少なからず受けている。²³ このように 1920 年代までの神智学協会の思想と実践は、3 世紀のプロティノスが起こした「新プラトン主義」に端を発する神智学思想の伝統を受け継ぐ一方、東洋仏教思想の一端を西洋社会に紹介する契機となり、多くの主要な思想家に具体的な影響を与えた他、1960 年代に入ってから、アメリカで大流行した「スピリチュアル・ブーム」と「東洋思想ブーム」の火元ともなったのだから、ブラヴァツキー夫人は、たとえその実体が狂信的な詐欺師であったとしても、彼女なりの死後生存説である「霊性進化論」が西洋／アメリカ思想史の上に大きな爪痕を残したことは認めざるを得ない。

「心霊現象研究協会」の誕生

ところで、ブラヴァツキー夫人の神智学協会が 19 世紀後半の死後生存説ブームの中の思想的側面の展開を請け負ったのに対し、科学的側面の展開を請け負った団体があった。それが 1882 年にイギリスにおいて設立された「心霊現象研究協会」(SPR = The Society for Psychical Research) である。²⁴ ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの古典学者であるヘンリー・シジウィック (Henry Sidgwick, 1838-1900)、シジウィックの弟子で「テレパシー」(telepathy) という新語の命名者でもあるフレデリック・マイヤーズ (Frederick William Henry Myers, 1843-1901)、そして同じくトリニティ・カレッジの心理学者エドモンド・ガーニー (Edmund Gurney, 1847-1888) の三人を発起人とし、心霊現象や超常現象を科学的に調査・研究する学術団体として設立された SPR の誕生は、それまで人々の好奇心の対象でしか

かった心霊現象を「超心理学」なる新しい科学分野の研究対象へと格上げすることになった。そしてイギリスにおけるこの動きはすぐさまアメリカに飛び火し、電話の発明で知られるアレクサンダー・グラハム・ベル (Alexander Graham Bell, 1847-1922) や、アメリカ心理学の父ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) らの肝煎りで 1885 年に「米国心霊現象研究協会」(ASPR = American Society for Psychical Research) がニューヨークに設立され、その 5 年後には先行するイギリス心霊現象研究協会の正式な支部となった。そして大西洋を挟んで設立されたこの二つの団体は、いずれも当代一流の哲学者や科学者、知識人によって運営され、SPR の歴代会長の中にはイギリス首相 A・J・バルフォア、著名な物理学者であるウィリアム・クルックスやオリヴァー・ロッジ、哲学者の C・D・ブロード、それにフランスの生理学者でノーベル賞受賞者のシャルル・ロベール・リシェ、フランスの哲学者で同じくノーベル賞受賞者のアンリ・ベルグソンなどが名を連ねた他、支持者として前述したカール・グスタフ・ユング、著名な美術評論家ジョン・ラスキン、作家ヴァージニア・ウルフの父親で文学史家のレズリー・ステイヴン、詩人のアルフレッド・テニスン、作家のルイス・キャロルやアーサー・コナン・ドイル、進化論の構築をダーウィンと競ったアルフレッド・ラッセル・ウォレス、『ハックルベリー・フィンの冒険』で知られるアメリカ作家マーク・トウェイン、さらにコナン・ドイルの講演を聴いてから心霊学の虜となり、後に著名な超常現象研究者となる J・B・ラインなど、学術・芸術分野で活躍した一流の人士を集めた。そして霊(＝人間の魂)の实在を科学的に実証しようという同協会の活動は、20 世紀初頭に至るまで活発に続いたのだった。

では一体なぜ、19 世紀末という時代において、多くの傑出した知識人や科学者たちがこぞって心霊現象の科学的解明に大きな期待を抱いたのか。それは当時の最先端の科学的発見や技術的革新が、ある意味、心霊現象に酷似していたからである。フォックス姉妹が引き起こした「ハイズヴィル事件」とモールス信号による遠距離通信法の確立との関連性については既に指摘した通りだが、この件からも窺えるように、当時の最先端科学は「電波」のような「目に見えないもの」の存在を次々と明らかにし、それを活用する方法を

見出していた。例えば先に名を挙げた物理学者にして SPR の会長を務めたウィリアム・クルックス (William Crookes, 1832-1919) は、1870 年代に「クルックス管」なるものを発明した人物でもあり、ヴィルヘルム・レントゲンが「X 線」を発見 (1895 年) したのも、クルックス管あってのことである。またクルックスと同じくイギリスの物理学者にして SPR の会長職を務めたオリヴァー・ロッジ (Oliver Joseph Lodge, 1851-1940) は 1894 年に「コヒーラ検波器」なるものを発明、これによって「電磁波」が発見され、電信の開発に拍車がかかった。事実、発明王エジソンの下で働いたこともある発明家のニコラ・テスラは、この技術を応用して 1898 年に船舶模型を使った「無線操縦」の実験に成功している。かくのごとく、当時の最先端に行く科学者たちにとって「目に見えないもの」をいかに捉えるかということこそライバルに差をつける決め手だったのであり、当時世を騒がせていた各種心霊現象が、最先端の科学者の目から見て、科学的新発見の可能性を秘めた広大な沃野に見えたのも不思議ではない。

また「目に見えないものの可視化」という意味では、イギリスで起きた写真にまつわるある事件についても触れないわけにはいかない。言うまでもなく 19 世紀は「写真の世紀」であり、写真技術が発達・普及していく時代であって、『不思議の国のアリス』の作者でもある数学者ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) が近隣に住む少女アリスをはじめ 300 人以上の少女の写真撮って、彼女たちが一瞬だけ示す儚くも蠱惑的な美を永遠に固定することに成功したのも 19 世紀半ばのことだったが、その後 20 世紀に入って一段と普及の進んだ写真機は、さらにとんでもないものを撮影してしまった。何と 1917 年、イギリスのコティングリー村に住む二人の少女、フランシス・グリフィス (Frances Griffiths) とエルシー・ライト (Elsie Wright) が、妖精の撮影に成功したのである。²⁵ シャーロック・ホームズの生みの親たるアーサー・コナン・ドイル (Arthur Ignatius Conan Doyle, 1859-1930) が、1920 年末の『ストランド』誌クリスマス特別号において、「写真に撮られた妖精たち」(“Fairies Photographed”) と題した特集記事で取り上げたことでイギリス中に知られることとなったこの「コティングリー妖精事件」、無論、妖精を写した 5 枚の写真は実際には件の少女たちの悪戯であったわけだが、

それにも拘わらず、カメラ・レンズという「科学の目」が、神話的存在と思われていた妖精の実在を示す証拠を提出したという噂は、イギリス全土を熱狂させることとなった。

このように、19世紀後半から20世紀前半にかけての時代、イギリスやアメリカで心霊ブーム（死後生存説ブーム）が沸き起こり、それがやがて思想的な出来事となっていくのは、「近代科学の発達があったにも拘わらず」ではなく、「近代科学の発達があったからこそ」だったのである。

第一次世界大戦の影響

だが、近代科学の発達の他にもう一つ、この時期に死後生存説の蔓延を促す要因があった。第一次世界大戦がそれである。

世界初の大戦争である第一次世界大戦において、多くの若者たちが兵士として戦地で命を落とした。そのことは死んだ若者たちにとっての悲劇であると同時に、その親にとっても同じく悲劇であった。そして息子を戦地で失った親たちは、せめて「あの世」で息子が元気に過ごしていることを切に願った。そうであるからこそ、先に名を挙げたオリヴァー・ロッジのような高名な物理学者が、怪しげな交霊会に頻繁に出入りし、第一次世界大戦中に戦死した息子と会話を交わすことに夢中になったのである。そしてそのオリヴァー・ロッジは、死んだ息子レイモンドとの霊媒師を通じた交信記録を『レイモンド』(*Raymond or Death and Life*, 1916)なる著書にまとめ、息子の霊が今もなお自分と共にあることを世に誇示したのだった。

オリヴァー・ロッジだけではない。アーサー・コナン・ドイルもまた1918年に長男キングスリーを第一次世界大戦で失っている。推理小説の権威たるコナン・ドイルともあろう人が、先に述べた「コティングリー妖精事件」において、これが妖精を写した真正な写真であると信じて譲らなかったのは、妖精の存在がウソであるならば、あの世で元気にしているはずの息子の存在の可能性まで否定することになるからだだった。そのことは、『新たなる啓示』(*The New Revelation*, 1918)という著書の中にコナン・ドイル自身が記した「(死後にも生命が持続するということは) 艱難辛苦の時にある人類にとって紛うかたなき彼岸からのメッセージであり、希望と導きである」²⁶ という

強い思い入れからも推察することができる。

第一次世界大戦で息子を失ったオリヴァー・ロッジやアーサー・コナン・ドイルの他にも、例えば 1852 年に弟を失った時、その予知夢を見たことを長年気に病んでいたマーク・トウェインであるとか、思いを寄せていた女性の自殺（1876 年）を食い止められなかったことを悔やんでいた SPR 創立メンバーのフレデリック・マイヤーズ、さらには 1885 年に 1 歳になったばかりの息子ハーマンを病気で失い、そのハーマンの死を霊能力によって言い当てた霊媒師レオノーラ・パイパー夫人との邂逅によって心靈学に傾倒していったアメリカ心理学の権威ウィリアム・ジェームズなど、SPR に関わった人たちの中には、愛する者を失ったことによる喪失感に悩まされていた人が少なくない。²⁷ そういう人たちにとって、あの世にいる近親者との交信の可能性は、何としても可能性以上のものであって欲しいものだった。だからこそ彼らはその可能性を追求する科学研究に大いなる期待をかけ、協力を惜しまなかったのである。その意味で 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて英米両国で生じた死後生存説は、「死の恐怖に打ち勝つための自己啓発思想」であると同時に、「死別の悲しみを克服するための自己啓発思想」でもあったのである。

とはいえ、19 世紀後半から 20 世紀最初の四半世紀にかけて英米両国を襲った死後生存説ブームも、1930 年代末に出版された『死後生存の証拠』(Zoe Richmond, *Evidence of Purpose*, 1938, 及び Kenneth Richmond, *Evidence of Identity*, 1939) 辺りを最後に一旦収束することとなる。超常現象の科学研究自体はその後も継続されるのだが、それは「死後生存はありやなしや」ということではなく、人間の超能力を研究する方向に向かった。そしてその超能力研究の中心的存在となったのが前述した J・B・ライン (Joseph Banks Rhine, 1895-1980) で、彼はデューク大学においてテレパシーや千里眼など人間の超感覚的知覚 (ESP=Extra-Sensory Perception) の研究を続け、「近代超心理学の父」と呼ばれるようになる。²⁸

もっともラインの超能力研究は必ずしも再現性の高いものではなく、今日ではほとんど顧みられていない。では一体なぜ、そんなラインの研究が 1940 年代以降もアメリカ政府の肝煎りで継続されたかと言えば、それは米ソ両大

国による冷戦の影響による。今では信じられないことではあるが、アメリカ政府は 1960 年代末頃まで、テレパシーを使ったマインド・コントロールや遠隔操作など、人間の超能力を軍事的に利用することを本気で検討しており、ラインの研究もその一環として支援されていたのである。一方、対するソ連政府もレニングラード大学の超心理学者レオニド・ヴァシリエフ（Leonid Vasiliev, 1891-1966）を支援して同様の研究を進めていたのだから、米ソ冷戦とは、核ミサイルの開発競争のみならず、その陰で密に行われていた超能力開発競争の謂いでもあった。

だが、そんな軍事的超能力研究も、1960 年代後半に入って、いわゆる「MK ウルトラ計画」の終了と共に方向性を失うことになる。また、これに代わって LSD をはじめとする各種幻覚剤の（軍事利用のための）研究が始まると、これを聞きつけた民間人、とりわけ「ヒッピー」と呼ばれた若者たちの間で幻覚剤を用いた「意識変容」の可能性が取り沙汰されるようになり、さらにはそうした意識変容に基づく「ニューエイジ」の到来への希求が高まっていくのだが、この点に関しては別稿において論じたので、²⁹ ここではこれ以上取り上げない。

エリザベス・キューブラー＝ロス

いずれにせよ、19 世紀後半以降の英米両国における心霊ブームから派生した死後生存説は、20 世紀半ばには「人間の超能力開発」という側面に飲み込まれる形で、一旦、表舞台から遠のくこととなった。しかし、その後 1960 年代も後半に差し掛かった頃、エリザベス・キューブラー＝ロス（Elisabeth Kübler-Ross, 1926-2004）という一人の医者登場によって、死後生存説はそれこそ不死鳥のように息を吹き返し、広くアメリカ社会の耳目を集めることになる。³⁰

エリザベス・キューブラー＝ロスはスイスの出身なのだが、彼女の母国スイスでは、人は自宅で、家族に自分の死後のことを託した後、皆に見守られながら穏やかな死を迎えるのを常としていた。ところが彼女が医者となって移住したアメリカの大都市の近代的な病院では、終末期患者は完璧に滅菌された清潔な病室の中、チューブや機械につながれ、医師と看護婦にモノのよ

うに扱われながら臨終の時を迎えていたのである。そんなアメリカの近代医療の在り方を目の当たりにして強い違和感を覚えたロス、(同僚からの強い反発と抵抗に遭いながらも) 終末期にある患者たちに直接聞き取り調査をすることによって、死を目前にした彼らの真のニーズがどこにあるのかを突き止めようとした。そしてその患者たちがロスに吐露した心情の中から浮き彫りになったのは、既に死期を悟り、それを受け入れた患者にとって、延命治療はまったく意味がない、ということだった。終末医療が目指すべきは、患者を最後の瞬間まで生にしがみつかせるのではなく、逆に彼らに死を受容させることだったのである。

実際、ロスによると、自らの死を受け入れた終末期患者が飛躍的な人間的成長を遂げることは決して珍しいことではないという。そしてそのことからロスは、「死の受容」こそ人間に与えられた最高の恩寵であると考えたのである。ロスはそのことを『死ぬ瞬間』(*On Death and Dying*, 1969) や、その続編たる『死、それは成長の最終段階』(*Death: The Final Stage of Growth*, 1975) といった一連の著書の中で非常なる説得力をもって主張した他、終末期を迎えた患者に痛みの軽減と心理的癒しを与える施設としての「ホスピス」の導入や、HIV 患者のための医療センターの建設を通じて、終末医療の在り方の改革や医療現場で働く人々の意識変革に尽くした。このようにエリザベス・キューブラー＝ロスの初期から中期にかけての著書・業績は、死という現象が持つ肯定的な側面を評価するという点で、(死を無視する)「達観法」や(死という現象自体を否定する)「魂不滅説／死後生存説」とも異なる新たな「死をめぐる自己啓発思想」として、「受容法」とも呼ぶべき自己啓発思想を打ち立てたと言ってよい。そして実際、ロスの初期から中期にかけての一連の著書は、受容法に基づく「死生学」(タナトロジー・*thanatology*) の基本文献としてベストセラー／ロングセラーとなり、医療関係者のみならず、近親者を看取る立場にある多くの人々に強い影響を与え、また終末期にある患者たちにとっては大いなる慰めとなった。

臨死体験

ところが、その後、ロスは自らが提唱した「受容法」から少しずつ逸脱し

始める。

ロスには死に直面している人々への聞き取り調査を繰り返す中で、臨死状態になった後で蘇生した患者たちが、ある一定の共通体験——いわゆる「臨死体験」(NDE、Near-Death Experience)——をしていることに気づくのである。それによると、臨死状態になると同時に、患者たちの魂は肉体を抜け出して天井近くに浮き上がり、自らの肉体を見下ろすような形になるという。そしてそのようにしてしばらく空中を漂っている内に、既に亡くなっている親族や知人の霊が迎えに来るので、彼らに従ってトンネルのようなところを潜り抜けると、今度はその先に圧倒的に美しい光と愛の世界が現れる。臨死体験の後に蘇生した患者の多くは、この美しい世界にまさに溶け込もうとする刹那、何らかの理由で引き戻され、自分自身の肉体の中に入り直す経験をしていたのである。

かくして蘇生患者から今述べたような体験談を繰り返し聞いたロスは、彼らが紛れもなく死後の世界を垣間見たのだと推測する。そして人間の死とは、無に帰することではまったくなく、それどころか蛹が蝶に生まれ変わるごとく、古い肉体を脱ぎ捨て、魂となって、光と愛の世界に帰ることなのではないかと考えた。そしてこの考えは、彼女が若い頃に訪れたアウシュビッツの強制収容所跡地で、ガス室に消えたユダヤ人たちがその直前に収容所の壁に刻んだ無数の蝶の絵の記憶とも重なって、一つの確信へと変わってゆく。

かくしてこの確信を得たエリザベス・キューブラー＝ロスは、以後、単なるタナトロジーの提唱者であることを止め、人間が死んだ後の新たな生命活動についての研究者、すなわち「死後生」についての研究者へと変貌を遂げる。つまり死のメリットを強調する「受容法」の提唱者から「死後生存説」の提唱者へと、一部、宗旨替えすることになったわけだが、ロスのその方面での研究成果は旺盛な講演活動を通じて公にされた他、後に『死後の真実』

(*On Life after Death*, 1991) や『「死ぬ瞬間」と死後の生』(*Death Is Of Vital Importance*, 1999)、さらに『ライフ・レッスン』(*Life Lessons*, 2000) といった著書にまとめられることになる。ただしロスの臨死体験研究／死後生研究は、「人間は死ねば無になる」と考える医学界の常識に反していたため、ロスはこの方向の研究に取り組み始めたことによって、科学者としての名声

を犠牲にすることにもなったのだった。

ロバート・モンローの体外離脱現象

ところが、孤高の死後生研究者ロスは、孤高のままでは終わらなかった。彼女の「死後生存説」をサポートするような言説が、1970年代に入ったアメリカに次々と生じてきたからである。例えばその一つが、「体外離脱現象」にまつわる言説であった。

アメリカにおいて体外離脱現象——臨死体験を「NDE」と呼ぶのに対し、体外離脱現象は一般に「OBE」(=Out-of-the-Body Experience)と呼ばれる——を一般に知らしめることになったのは、ロバート・モンロー (Robert A. Monroe, 1915-95)³¹ という人物の功績である。そしてそのロバート・モンローが自らの体外離脱能力に気づいたのは、偶然の出来事がきっかけだった。1958年、モンローは当時アメリカで話題になっていた「睡眠学習」の教材の開発を目指していて、その効果を自身で体験すべく、学習用テープを聴きながら眠りに就いたのだが、この時彼は初めて体外離脱をし、ベッドで寝ている自分自身を天井付近から見下ろすという体験をするのである。そしてこの驚くべき体験の後、元々理工系で好奇心の強かった彼は、どうすれば意図的に体外離脱ができるようになるのかを研究し始め、その結果、その後12年間に589回もの意図的な体外離脱を成功させる。かくしてモンローは、体外離脱するようになった経緯や体外離脱によって目にすることができた別次元の世界の様子——それは前述した18世紀の科学者／神学者エマニュエル・スウェーデンボルグの天界報告³²や、イギリスの物理学者オリヴァー・ロジの息子レイモンドが、霊媒師を通じて父オリヴァーに報告してきたあの世の様子³³とも共通するところの多いものであるが——を詳細に記した『体外への旅』(*Journeys Out of the Body*)という本を1971年に出版し、これがベストセラーとなったことで、アメリカでは体外離脱現象の存在が一般に知られることとなる。

モンローのOBE研究は、一面においては、前述した米ソ冷戦時代の超能力研究の文脈の中に位置づけられる。事実、モンローは『体外への旅』がベストセラーになったのを機に、体外離脱を専門に研究する研究所として私費

で「モンロー研究所」を創設し、それを使えば誰もが体外離脱を経験できるという音響機器「ヘミシンク」(Hemi-Sync)を開発して特許まで取ったというのだから、彼の研究には超能力開発の側面があったことは明らかであろう。しかしその一方、彼が自らの実体験として報告した体外離脱の在り様——すなわち離脱後、魂(彼の用語では「第二の身体」(second body))が天井付近に浮き上がって自らの身体を見下ろすところや、その後、天国のような場所(彼の用語では「ロカル 2」(locale II))で「彼」(神?)に会うところなど——と、エリザベス・キューブラー＝ロスが報告する蘇生患者たちの臨死体験の在り様が非常によく似ていることも事実で、このためモンローの語る体外離脱言説は、臨死体験／死後生言説としての側面も合わせ持っていたのである(事実、モンローが自らを被験者とした体外離脱実験を行う上で最も恐れたのは、体外離脱した魂が最終的に自分の身体に戻れなくなり、そのまま死んでしまうことだった)。そのため、モンローの『体外への旅』がベストセラーとなったことは、結果としてエリザベス・キューブラー＝ロスの臨死体験／死後生言説の信憑性を間接的にサポートすることとなり、科学者失格の焼き印を押されていたロスにとっては恰好の援軍となった。

さらなる援軍：レイモンド・ムーディ著『かいまみた死後の世界』

しかし 1970 年代も中ごろになると、モンローの著作よりもさらに強力にロスの臨死体験／死後生言説を裏書きするような本が次々と出版されることになる。そしてその端緒となったのが、レイモンド・ムーディ・ジュニア(Raymond Moody Jr., 1944-) が 1975 年に出版した臨死体験の研究書、『かいまみた死後の世界』(*Life After Life*, 1975) であった。³⁴

ムーディはヴァージニア大学大学院哲学科で博士号を取った後、改めてジョージア医科大学に進学して精神医学研究を目指すようになったという変わり種だが、そもそも彼が臨死体験に興味を持ったのは、まだヴァージニア大学の学部生だった頃、たまたま同大学の精神医学科の教授ジョージ・リッチーから臨死体験談を聞かされたことがきっかけであった。そしてこれを機に臨死体験に興味を覚え、自身の研究テーマに据えてその事例を集め始めたムーディを驚かせたのは、たちまちのうちに 150 例もの臨死体験が集まったこ

とだった。医学の進歩により臨死状態から蘇生するケースが増えていたということもあるが、実は臨死体験というのはさほど珍しい事例ではなかったのである。そのことがそれまで世間に知られていなかったのは、「死」について語ることがタブー視されていたことに加え、仮にそれを担当医や家族・知人に語っても相手にされず、むしろ奇異な目で見られることから、患者自身が臨死体験について語ることを自制していたからだった。

かくしてムーディは集まった事例を分析し、『かいまみた死後の世界』を発表するのだが、この中でムーディは典型的な臨死体験を以下の 15 項目に集約している：

- ①医師の死の宣告を耳にする
- ②耳障りな音を聴く
- ③トンネル状の場所の通過
- ④物理的肉体からの離脱の自覚
- ⑤自らの肉体の上方からの俯瞰
- ⑥自らが陥った状況の自覚
- ⑦物理的肉体とは異なる新しい状態にある自らの身体の自覚
- ⑧既に死んだ親族・友人・知人の霊との再会
- ⑨愛と温かさに満ちた「光の生命」の出現
- ⑩「光の生命」から言葉を使わぬコミュニケーション法によって人生を総括するような質問を受ける
- ⑪自らの生涯を連続した映像として振り返る機会が与えられる
- ⑫現世と来世の境界に到達
- ⑬現世に留まるべきことを自覚
- ⑭現世に留まる義務と、美しい来世に入ることへの渴望の間で、葛藤が生じる
- ⑮意に反して再び自分自身の物理的肉体と結合し、蘇生する

と、このように挙げてくると、ムーディが 15 項目に分類した臨死体験の実態が、前述したエリザベス・キューブラー＝ロスの臨死体験聞き取り調査

の結果と重なる部分が多いことは誰しも気づくところであり、ロスが終末期にある患者たちへのインタビューの中から紡ぎだした「死後生存説」は、ムーディの科学的な臨死体験研究によって見事に裏書きされたのである。

そしてそのムーディの『かいまみた死後の世界』が、意外にも大ベストセラーになったことを契機として、アメリカでは 1970 年代後半から 1980 年代にかけ、臨死体験研究が大流行することになる。例えばカーリス・オシスがエルレンドゥール・ハラルドソンとの共著で『人は死ぬ時何を見るのか』

(Karlis Osis & Erlendur Haraldsson, *At the Hour of Death*) を出したのが 1977 年、翌 1978 年にはモーリス・ローリングズが『死の扉の彼方』

(Maurice Rawlings, *Beyond Death's Door...*) を出版し、これに続いてケネス・リングが『いまわのきわに見る死の世界』(Kenneth Ring, *Life at Death*, 1980)、『霊界探訪』(*Heading Toward Omega: In Search of the Meaning of the Near-Death Experience*, 1984)、『オメガ・プロジェクト』(*The Omega Project: Near-Death Experiences, UFO Encounters, and Mind at Large*, 1992) という 3 部作を次々と世に問う。さらにマイクル・B・セイボムが『死の記憶』(Michael B. Sabom, *Recollections of Death*, 1982) を、またブルース・グレイソンが『臨死体験』(Bruce Greyson, *The Near-Death Experience*, 1984) を出した他、レイモンド・ムーディ自身も前著の続編となる『続 かいまみた死後の世界』(*Reflections On Life After Life*, 1977)、及び『光の彼方に』(*The Light Beyond*, 1988) を出すなど、多くの研究者が相次いで臨死体験研究に参入し、その成果を世に問うことになった。

そればかりではない。ロスがきっかけを作り、ムーディが後押ししたアメリカ 20 世紀後半の臨死体験ブームは、同時代の研究者たちを刺激だけでなく、過去の同様の研究の掘り起こしをも促すことになる。例えばスイスの地質学者でチューリヒ大学教授のアルバート・ハイム (Albert Heim, 1849-1937) が、滑落をした登山家たちの臨死体験をスイス・アルパイン・クラブの年報 (1892 年) で報告しており、これが臨死体験報告の最も初期の例と言われているのだが、ハイムの報告は 1972 年にラッセル・ノイスとロイ・クレッティによって翻訳され、再注目されることとなった。³⁵ また英国の著名な歴史家アーノルド・J・トインビーによって編集されたものの、事実を重ん

じる歴史学の世界では等閑視されていたアンソロジー『死について』(*Man's Concern with Death*, 1968) も、時流に乗って改めて見直されることとなった。そして活況を呈する臨死体験ブームはたちまち象牙の塔を飛び出し、『ナショナル・エンクワイアラー』(*National Enquirer*) や『リーダーズ・ダイジェスト』(*Readers' Digest*) といった庶民的かつ扇情的な新聞・雑誌がこの話題を嬉々として取り上げた他、1978年には臨死体験を扱った低予算ドキュメンタリー映画 (*Beyond and Back*) まで作られたという。³⁶

ちなみに、上記した各種臨死体験研究関連本が異口同音に主張するところによると、臨死体験をした者は、以後、死をまったく恐れなくなるという。それは死んだ後も自分の意識が失われないことを実地に体験し、かつ、既に死んだ知人との遭遇によって、死んだ後も人間が存在し続けることを確信するからである。そして死を恐れなくなることは、臨死体験以後の体験者の人生の質(=QOL、Quality of Life)の向上に直結する。これは先の不安なく今生の生を充実させたいという意味が働くためで、換言すれば、臨死体験は非常に効果の高い自己啓発体験でもあるのだ。だからこそ臨死体験ブームの中で次々と出版された関連出版物は、学問的／科学的な本というよりもむしろ自己啓発本として世に出回り、直接臨死体験をしたことがない人の QOL を上げることに也大いに貢献したのである。

生まれ変わり言説

ところで、「臨死体験研究」によって人間の魂が死後も存続することが(少なくとも仮説として)成立するようになると、一度死んだ人間が再びこの世に生まれ直すこともあるのではないかという推測が生じてくるのも無理はない。実際、臨死体験研究が世の耳目を集めるようになったのと並行するように、1980年代のアメリカでは「生まれ変わり言説」が盛んに出回ることになる。

だが、1980年代アメリカにおける生まれ変わり言説の流布について述べる前に、それに先立つ生まれ変わり言説全般についても言及しておこう。

信じるか信じないかは措くとして、「生まれ変わり」という現象自体は昔から世界各地にある。古代ギリシャのソクラテスが生まれ変わりを信じていた

ことは既に述べたが、ギリシャ以外でも中近東、西アフリカ、東アフリカ、ブラジルの一部、北アメリカ北東部の先住民族、トロブリアンド諸島、東アジア全般に同種の信仰はあり、むしろ生まれ変わり信仰のない西欧キリスト教諸国や正統イスラム教諸国の方が少数派というところがある。³⁷ 自身生まれ変わりを信じていたドイツの哲学者アルトゥール・ショーペンハウエル (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) は、「もしアジア人にヨーロッパの定義を聞かれる破目に陥ったら、私としてはこう答えざるをえまい。人間は生まれた時に始まり、無から造り出される、という途方もない妄想に完全に支配されている世界の一角である、と」と述べているが、³⁸ ことほど左様に、世界的に見れば「人生は一度切り」という考え方の方が不自然なのだ。無論、日本は世界基準から言えばノーマルな範疇に入っているのもあって、古くは平安時代初期の説話集『日本霊異記』に生まれ変わり事例が数多く見られるし、また江戸後期の国学者・平田篤胤が記録した『勝五郎再生記聞』は、小泉八雲が紹介したこともあり、アメリカでもよく知られている。

また 20 世紀以降の重要な生まれ変わり言説ということになると、前述した『チベットの死者の書』(1927) にも触れておかななくてはならない。神智学協会に所属していたウォルター・エヴァンス＝ヴェンツが英訳に成功したこの仏典には、人間が死んだ後、その魂はバルドゥ (= 中有) と呼ばれる中間生に滞在すること、またそこで悟りを開けずカルマ (業／前世から持ち越した宿題というような意味) から解脱できなかった場合には、輪廻によって再び地上に生まれ変わるなどが詳細に記されているのだが、前述したようにこの本はカール・グスタフ・ユングに大きな影響を与えたということでユング派の心理学者たちの間ではつとに知られていたし、また 1960 年代のアメリカにおいては、スピリチュアルなものに興味を抱いていたヒッピーたちの間での必読書ともなっていた。³⁹ つまり『チベットの死者の書』という特異な本を通じて、「中間生」や「カルマ」、あるいは「輪廻」といった「生まれ変わり言説」に関わる諸概念は、20 世紀後半のアメリカにおいて、少なくとも知的好奇心の旺盛な人々の間では、ある程度まで浸透していたのである。

「眠れる予言者」エドガー・ケイシーと「ブライディ・マーフィ伝説」

しかし、そうした知的上流階級の人々のみならず、アメリカの一般大衆の間に生まれ変わり言説が意識されるようになったのは、エドガー・ケイシー (Edgar Cayce, 1877-1945) ⁴⁰ の登場に拠るところが大きい。

エドガー・ケイシーは元々ケンタッキー州出身の保険セールスマンであったが、失語症にかかり、仕事に支障を来したため、当時流行していた催眠療法を試みた。すると催眠中に別人格が現れ、失語症の治療法を療法士に向かって語り出したので、覚醒後にそれを試すと、失語症が快癒してしまった。別人格はケイシーの前世の姿の一つ、古代ギリシャの化学者であり、医学の知識を持っていたのである。かくして自らの特異な才能に気づいたケイシーは、以後、催眠状態で病気に悩む人々の治療に当たるようになった他、予言もするようになり、その多くが的中したことから「眠れる預言者」(sleeping prophet) の異名を持つようになる。事実、1947年にクムラン洞窟で発見された「死海文書」の発掘場所も予言していたというのだから、その予言の精度は相当に高いものであったが、ケイシーによれば、この世が始まって以来のあらゆる情報を記した「アカシック・レコード」(akashic records) というものがあって、これにアクセスすることで、彼は個々の患者の病気の原因を突き止め、また予言に必要な情報を得ていたという。しかもそのアカシック・レコードとは、輪廻転生を続ける人間の靈魂の潜在意識の記録庫だということだから、ケイシーが人々の病気を治し、また数々の予言を的中させたことは、取りも直さず、人間が輪廻転生を繰り返していることの証明でもあった。そしてこのようなケイシーの特異な人生と業績は、彼の最晩年に出版されたトマス・サグルーによる伝記『永遠のエドガー・ケイシー』(Thomas Joseph Sugrue, *There Is A River: The Story of Edgar Cayce*, 1942) や、死後に出了たジナ・サーミナラの『転生の秘密』(Gina Cerminara, *Many Mansions*, 1950) といった関連本によって広く知られることとなり、それと同時に輪廻転生、すなわち「生まれ変わり」という現象の存在が、広くアメリカの一般大衆の間に認識されることにもなったのである。

ところがアメリカにおける生まれ変わり言説の広まりは、エドガー・ケイシーに関するものだけに留まらなかった。1950年代に入ったアメリカにもう一つ、ヴァージニア・タイ (Virginia Tighe, 1923-95) ⁴¹ という女性にまつ

わる興味深い生まれ変わり言説が登場するのだ。ヴァージニア・タイはアメリカ・コロラド州に住む主婦であったが、ある偶然からアマチュア催眠術師モーレー・バーンスタインに催眠術をかけられることになり、その際、トランス状態のまま、アイルランド人「ブライディ・マーフィ」(Bridey Murphy)として1798年12月20日に生まれたことや、1864年に66歳で亡くなるまでに経験したことを詳細に語り出す。そして驚いたバーンスタインがこれら一連のことを『第二の記憶:前世を語る女ブライディ・マーフィ』(*The Search for Bridey Murphy*, 1953)なる著書にまとめて出版したところ、この本は大ベストセラーとなり、「ブライディ・マーフィ」の名はもちろんのこと、「前世記憶」や「生まれ変わり」といった用語が全米で人々の口の端に上ることとなった。

ちなみにこの一件に関して特徴的なのは、ヴァージニア・タイがアイルランド人「ブライディ・マーフィ」としての人生(=前世)を語った時、明確なアイルランド訛りで語ったという点である。この現象は、先に名を挙げたフランスの生理学者シャルル・ロベール・リシェの命名によって「異言」(xenoglossy)と呼ばれるのだが、ヴァージニア・タイが本来知るはずのない異言を語ったこと、しかもそれが録音され、バーンスタインの著書の出版に合わせてLPとして発売までされたことで、タイの前世記憶の信憑性は格段に上がることになり、これ以後、異言を語るかどうかが正真正銘の生まれ変わりかどうかを判断する決め手となっていく。

かくしてヴァージニア・タイ／ブライディ・マーフィの一件がアメリカの一般大衆の間に広く知られるようになってからというもの、例えば『晴れた日に永遠が見える』(*On A Clear Day You Can See Forever*, 1970)のように、退行催眠によって前世(及び来世)を知った女性(バーブラ・ストライサンド)と、彼女に催眠術をかけた男性教授(イヴ・モンタン)の恋を扱ったラブ・コメディ映画が人気を博したり、あるいはグレン・ウィリントンとジュディス・ジョンストンの共著になる『生きる意味の探求』(Glenn Williston & Judith Johnstone, *Discovering Your Past Lives*, 1983)であるとか、J・L・ホイットンとJ・フィッシャーの共著になる『輪廻転生』(Joel L. Whitton & Joe Fisher, *Life Between Life: Scientific Exploration into the*

Void Separating One Incarnation from the Next, 1986)、あるいはブライアン・ワイスの『前世療法』(Brian L. Weiss, *Many Lives, Many Masters*, 1988) など、精神科の医者が患者に退行催眠をかけていて、期せずして患者の前世(あるいは中間生)を発見してしまうといった類の本が数多く世に出回ることにもなった。そしてそのことは「前世や中間生がある以上、来世に生まれ変わることもあるはずで、その意味で人間の魂は不滅なのかも知れない」という希望的臆測を広める一助にもなったのだった。

実際、臨死体験研究の世俗的流行や生まれ変わり言説の流布により、1970年代後半から1980年代初頭にかけてのアメリカでは、死後生存を信じる人が激増する事態となった。事実、1980年初頭から翌年9月にかけて、民間世論調査会社のギャラップ社が調査したところ、全米総人口の15%に当たる2,300万人が何らかの形で死にかけた経験を持ち、その内の800万人が臨死体験をしていたという。また体外離脱を経験した人は200万人もおり、「天国の存在を信じる」人は全人口の70%にも及んでいた他、全人口の23%が「生まれ変わり」を信じているという結果も出ている。⁴² このように、当時のアメリカ人にとって死後生存説が身近なものになっていたからこそ、人気女優シャーリー・マクレーン(Shirley MacLaine, 1934-)が『アウト・オン・ア・リム』(*Out on a Limb*, 1983)や、その続編である『ダンシング・イン・ザ・ライト』(*Dancing in the Light*, 1986)などの著書において、前述したエドガー・ケイシーの影響を受けて輪廻転生を信じるようになったことや、前世ではアトランティス大陸で戦士をしていたことを告白しても、白眼視されるどころか、そのまま素直に受け入れられ、上記二冊の著書は共にベストセラーとなったばかりか、ニューエイジ思想の何たるかを知る上での基本文献となったのである。

「言説」から「科学」へ：イアン・スティーヴンソンの登場

もっとも、1980年代前半までのアメリカにおける生まれ変わり言説は主として神智学的なもの、もしくは体験談的なものが主流であって、信じる／信じないの別はその言説を受け取る側の判断に委ねられるという意味で、非科学的なものに過ぎなかった。換言すれば、それを信じる者にとっては死への

恐怖が著しく減じる一方、信じない者にとっては、死は相変わらず恐ろしいものであり続けた、ということになる。

ところが 1987 年、事情はがらりと変わる。この年、ヴァージニア大学精神科主任教授イアン・スティーヴンソン (Ian Stevenson, 1918-2007) が『前世を記憶する子どもたち』(*Children Who Remember Previous Lives*) という画期的な研究書を出したことによって、生まれ変わり言説は科学的に実証可能な「事実」へと、その装いを一新するのである。⁴³

もっとも、ここで一つ注意しておくべきなのは、スティーヴンソンは「生まれ変わり現象」の研究者ではない、ということである。彼は元来、そして徹頭徹尾、「前世記憶」についての研究者なのだ。まだ三十代の頃、前世記憶を持って生まれてくる子供が存在するということを伝え聞いたスティーヴンソンは、この現象に興味を持ち、以後四半世紀以上に亘って調査と分析に取り組んだ。いかに信じがたいことであれ、前世記憶を持つ子供がいるというのであれば、それが真実なのか否かを検討する必要がある——これがスティーヴンソンの科学者としての立場だったのだ。

かくしてスティーヴンソンは、研究チームを編成し、世界 8 文化圏での現地調査を行うのだが、この研究を開始して間もなく、スティーヴンソンがまず最初に発見したのは、前世記憶現象が決して珍しいものではないということだった。事実、最初の現地調査としてインドに出向いた際には、わずか 5 週間の滞在中、25 もの前世記憶事例が見つかった他、その後 25 年の間に 2,000 例を超える事例を見つけたというのだから、そのつもりで探せば前世記憶の事例は世界中にいくらかもあるのだ (15, 198)。

では、前世の記憶を語る子供とは、一体どのような子供なのか。

スティーヴンソンの調査によれば、前世を語る子供の過半数 (62%) が男児で、2 歳から 5 歳までが最も多く (162)、以後、5 歳から 8 歳くらいまでの間にその記憶が薄れていき、その後は前世のことをさほど語らなくなるという (189)。

ただし、まれに 2 歳以前、すなわちまだ言葉が話せないほどの時点で既に前世の影響が見られる子供もいて、例えば家族の中でその幼児だけが異常に水を怖がり、川に連れて行くと火がついたように泣くというようなことがあ

る。そして言葉が話せるようになってから、「自分は以前は〇〇という名前で、かつてその川のその辺りで溺死した」などと言い出し、実際に調べて見ると、確かに以前、そこでそういう名前の子供が溺死していたことが判明したという（103・7）。同様に、刃物で刺されて死ぬ、あるいは銃で撃たれて死ぬといった前世記憶を持つ幼児は、言葉を話すようになる以前から刃物や銃器を異常に怖がったり、前世で受けた刀傷や銃創が痣や身体的欠損となって現れることもある（180）。

前世記憶を持つ子供たちのこうした奇妙な言動は、2歳を過ぎて言葉が話せるようになると、さらに興味深いものとなる。例えば家族の中で一人の子供だけが、親兄弟すら食べたことのない特殊な麺料理を食べたがるので、調べて見るとその麺料理はその子供が前世で住んでいた地域の名物料理であったというような例（116、299）、あるいは、酒好きの男の前世記憶を持つ子供が、2、3歳の頃からしきりに酒を飲みたがって親を困らせた、というような例がある（300）。これらは個人的嗜好に関する例だが、職業に関する前世記憶も長く残るようで、例えば前世でナイトクラブを経営していたという幼児が、自宅に酒場を開こうとしたケースがあるし（182）、誰からも頼まれもしないのに幼い頃から箸を自作し、家の周りを掃いて回る少女がいて、理由を尋ねると「自分はかつて掃除婦であった」と答えたということもある（280・1）。またかつて日本人の兵隊だったと語る子供が戦後のビルマに生まれたケースがあって、日本人に対して強い親近感を抱く反面、その子供の前でイギリスやアメリカの話をすると烈火のごとく怒ったという（100・3）。

さらに、これはインドでしばしば見られることであるが、異なるカーストに生きた前世記憶を持つ子供がいて、このような場合は、時に困難な事態を引き起こす。例えば前世でバラモン階級に属していたことを記憶している子供が下位カーストの家に生まれた場合など、子供の時分に家の手伝いをさせようとしても、「そんなことは召使のやることだ」と言って断固はねつけるとか（94・7）、さらに深刻なケースとしては、家人が触った食器を「汚い」と言って手をつけようとせず、あやうく餓死しかけるというようなことがあるという（190）。逆に前世で下層階級に属していたことを記憶している子供がバラモン階級に生まれた場合、下層階級に特有の嗜好（豚肉食など）を表明し

て家族を面食らわせるといった例もある（182・3）。

イアン・スティーヴンソンの慎重さ

このように、現象としては非常に興味深い前世記憶現象であるが、これを厳密な学問の研究対象とするには、様々な困難が伴う。スティーヴンソンが苦勞したのも、まさにその点である。

そもそも、自分が前世では誰であったかを名乗り、その時に経験した出来事を語ったり、その経験に基づいた行動を取る子供が存在することから、その子供が前世記憶を持っているのではないかと疑われるようになるわけだが、このような前世記憶を持つ子供たちの存在は、通例、その子供自身や、その親・親戚・知人からの証言によって明るみに出るので、それを学問的研究の調査対象とするためには、まず彼らの証言の信憑性を確認しなければならない。実際、確認の必要性は大いにあるので、例えばスティーヴンソンがトルコで調査をしていた時、丁度ケネディ大統領暗殺の直後だったこともあり、「前世においてジョン・F・ケネディであった」と名乗る子供が一つの村の中ですら何人も出てきたことがあったという（228・9）。この例一つを取って見ても、関係者の証言をすべて鵜呑みにすることはできないのだ。

そこでスティーヴンソンは、前世記憶現象を自らの研究対象にするに当たって、信憑性の薄い事例を徹底排除することに意を用いた。前世記憶を持つ子供の事例報告を受けると、チームと共に現地に赴き、本人へのインタビューと親・親戚へのインタビューを別個に行なうのだが、その際、当該の子供が前世を語り出したのを直接聞いたことのある近所の住人からの証言を取ったり、さらに本人が「前世で住んでいた」と語る村にも行って現地の住民の証言を集めたりしながら当人の発言の真否を確認するなど、可能な限り何重にもクロスチェックをしながら極めて慎重にデータを採取したのである。例えばある家に「殺人事件で殺された男の記憶を持つ子供」が生まれた場合、採集したすべての証言が前世記憶の正当性を証していたとしても、仮にその殺人事件が当事者の家から比較的近い場所で起こっていた場合、報道や噂話でその殺人事件のことを両親（あるいは本人）が耳にした可能性は否定できないし、たとえそのことを両親が忘れていたとしても、心のどこかに残って

いた事件の記憶がテレパシーで子供に伝わったかも知れないので、このようなケースでは、これを前世記憶現象の証拠としては採用しなかったというのだから、スティーヴンソンがどれほどの厳密さをもって事例収集を行っていたかが分かる。しかし、それほど厳密に事例を選別し、信憑性の薄いケースを排除していても、やはり最後に「どう考えても、その子供が前世の記憶を持って生まれてきたことは疑えない」という例が残っていくので、スティーヴンソンは、そうした絶対確実という例だけを研究対象に据えたのである（ちなみにスティーヴンソンは、前述したヴァージニア・タイの事例は信憑性が高いと判断している（78））。

作業仮説としての「生まれ変わり」

以上述べてきたことから明らかなように、イアン・スティーヴンソンの研究の特筆すべき点は、前世記憶を持つ子供に対して、極めて厳密な「文化人類学的アプローチ」を試みたことにある。そしてその四半世紀に亘る調査・研究の末に、スティーヴンソンは、前世記憶を持つ子供が存在する理由として、「彼らは、生まれ変わったのだ」と考えるのが最も妥当だ、と結論づけるのである。

と言っても、慎重なスティーヴンソンのこと、彼は前世記憶現象を説明するものとして、拙速に「生まれ変わり」に飛びついたわけではない。それ以外の可能性として、「潜在意識」とか「記憶錯誤」、あるいは「遺伝」や「超感覚的知覚」（＝テレパシー）、さらには「霊の憑依」といったことまで十分に検討している。しかし、そのような様々な可能性をすべて検討した上でなお、前世記憶現象の説明としては「生まれ変わったから」と考えるのが一番無理がないと判断したスティーヴンソンは、いわば「作業仮説」として、「生まれ変わり現象」を暫定的に受け入れる。前世記憶の研究者たるスティーヴンソンが、生まれ変わり言説の真否に関わり始めるのは、まさにこの瞬間なのだ。

そして、ここが最も興味深いところでもあるのだが、たとえ暫定的仮説としてであれ、生まれ変わり現象が実際にあると認めると、それを認めることがいかにメリットの多いことであるかが判明する。と言うのも、生まれ変わ

り現象を事実として認めると、そのことは単に前世記憶現象がなぜ起こるのかを説明するばかりでなく、それ以外の人間にまつわる様々な現象についても、見事に説明してしまうからである。

一例として、人間の嗜好について考えてみよう。例えば幼児期に特定の遊び——例えば戦争ごっこ——を非常に好む子供がいるとする。その場合、従来の心理学的解釈では「その子供は、自らの攻撃衝動を『戦争ごっこ』という遊びの形で代理的に解消している」というように説明されるわけだが、ここで「生まれ変わり仮説」を踏まえると、「その子供は前世で兵隊だったから」というシンプルな、しかし非常に説得力のある説明がついてしまう（277）。また人形を与えられた幼児が、その人形に瞬時に特定の名前を付けて愛玩し始めるというようなことはしばしば観察されるのだが、なぜ人生経験の浅い幼児にその名前が思いついたのかということについても、「前世でそういう名前の知人がいたから」と考えれば容易に納得できる（281）。

また、これは昨今の LGBTQ 問題にも関わることであるが、女性として生まれたものの心は男性である、あるいは逆に男性として生まれたものの心は女性である、といった人が実際に存在する。こうした現象について、なぜそうなのかということを考えた場合、「遺伝」や「環境」に解を求めるとすると、「では、その子の兄弟姉妹も同様に LGBTQ になってもおかしくないのに、必ずしもそうになっていないのはなぜか」という疑問が生じてしまう。しかし、ここに「生まれ変わり仮説」を導入し、「その子供は、たまたま生まれ変わった時に性別が逆転してしまった」と考えると、簡単に整合性のある説明がついてしまう（267-71、284-7）。その他、先に言及した「乳幼児期のいわれなき恐怖症」や「一見理不尽な攻撃性」、「職業選択上の先天的な志向」、あるいは「早熟な性衝動」や「既視感」、「左利き」といったことについても、「遺伝説」や「環境説」に代わる第三の観点として「生まれ変わり仮説」を導入すると、立ちどころに説得力のある説明がついてしまうのだ（第9章）。

「生まれ変わり仮説」はなぜ自己啓発思想になり得るのか

また「生まれ変わり仮説」がもたらす利点としてもう一つスティーヴンソンが挙げているのは、これを受け入れることによって、人の世に存在する不

可避的な「不公平」を是正することができるということである（353-56）。

例えば「先天的欠損」を持って生まれてくる子供がいる。これを、キリスト教的な考え方で解釈すると、「（理由は神のみぞ知るだが）神が決めたこと」ということになり、また同じく西欧社会に普及している科学的解釈で説明すると、「（DNA のランダムな組み合わせによって）偶然そうなった」ということになる。そのどちらの説明も「運命／偶然の巡り合わせでそのようなことになったのは気の毒だが、それについてはいかんともし難い」と突き放しているのであって、当事者にとってはなんの慰めにもならないし、不公平感をぬぐい去ることはできない。

ところが、ここで「生まれ変わり仮説」を導入すると、先天的欠損は前世での自らの行いの結果ということになり、その意味で自業自得であると解釈される。このような考え方を東洋／仏教思想では「カルマ」と呼ぶわけだが、必ずしもカルマという概念を導入しなくとも、前世での経験が記憶と共に今生に引き継がれるとすれば、現在不公平な状況に自分が陥っているのもすべて自分自身のせいである、という説明がつく。無論、前世での責任を今生の自分が負うこと自体、不公平であると考えられなくもないが、「現在自分が被っている不公平には理由がある」と考える方が、いわれなき不公平に耐えるよりは耐え易いとは言えるだろう。

否、それだけではない。前世でのことが今生に引き継がれるのであれば、今生での行いが来世に引き継がれるということにもなる。そうであるとするならば、例えば老人になってから楽器を習い始めたことによって、来世では「音楽の天才」として生まれ変わる可能性もあるし、同じく人生の最晩年になってから数学の勉強を始めたことで、来世では「数学の天才」に生まれ変わることもあり得る。つまり人生のどの時点において始めた努力も来世でのメリットにつながるとなれば、「無駄な努力」というものは一切存在しなくなるので、それだけ今生での自己改善努力に力が入るということになる。『前世を記憶する子どもたち』の中でスティーヴンソン自身、「そのように考えると私は、老年になっても、たとえばクラリネットの演奏のような新しい技術を身に付けたい気持ちが起こる」（361）と述べているが、生まれ変わり仮説を受け入れることは、今、人生のどの地点にいるかを問わず、今生の人生を存

分に生きることを促すことでもあるのだ。生まれ変わり仮説は、その意味で、自己啓発思想に直結するのである。

生まれ変わり仮説の副産物

事実、イアン・ステューヴンソンの画期的な研究によって生まれ変わり現象が神話的言説としてではなく、学問的調査を踏まえた作業仮説となった1980年代半ば以降、これを前提とする様々な自己啓発思想が登場することとなる。

では、生まれ変わりを前提とする自己啓発思想とは、どのようなものなのか。

「生まれ変わりがある」と仮定した場合、人生における不公平感が無くなるということについては先に述べたが、この論理をさらに敷衍していくと、自分よりも恵まれている他人（＝ライバル）に対して嫉妬をする必要も無くなる。と言うのも、現在、たまたま自分は社会的に低い地位にあり、相手は社会的上位にいるとしても、それは今生限りのことであって、来世に生まれ変われば、両者の立場は逆転するかも知れないからだ。否、仮に来世でも再び相手の方が恵まれていたとしても、さらにその次の人生では逆転に成功するかも知れない。このように、他人との競争が一度切りのものでないとしたら、何も今生において張り合う必要もないので、自然、嫉妬心は消滅してしまう。シェイクスピアの『オセロー』を引き合いに出すまでもなく、嫉妬というものがいかに人の一生を狂わせるかという事を考えれば、嫉妬という感情を無化してしまう生まれ変わり仮説は、それ自体、非常に有益な自己啓発思想なのだ。

それどころか、1980年代後半の生まれ変わり仮説に「カルマ」という東洋思想の風味を改めて付け加えるならば、現在自分が送っている辛い人生は、生まれ変わる前、すなわち「バルドゥ」（＝中宥・中間生）にいた時に、カルマから解脱するために自分自身で自らに課した試練であると読み換えることができる。そしてこの論理をさらに推し進めていくと、今、自分が苦境に陥っていること自体、まさに人生が計画通り順調に行っている証拠であると解釈し直すこともできるのだ。例えば日本の自己啓発思想家・飯田史彦が「ブ

レイクスルー思考」というネーミングの下に提唱しているのも、まさにそのような発想の切り替えである。⁴⁴そして『生きがいの創造』をはじめとする氏の一連の自己啓発本が200万部という売り上げを記録していることを考えれば、このような発想の切り替えによって救われる人がいかに多いかを証していると言えるだろう。

「生まれ変わり仮説」から「トランスパーソナル心理学」へ

以上、歴史を古代ギリシャまで遡り、「達観法」「魂不滅説」「(ポルターガイスト系)死後生存説」「受容法」「(臨死体験系)死後生存説」「生まれ変わり仮説」といった様々な「死をめぐる自己啓発思想／本」を概観しつつ、それらが死の恐怖に怯える人々や、愛する人の死を諦めきれない人々を慰め、さらには人生に対する前向きな取り組みを促してきたことを見てきた。だが、実はもう一つ、未だ言及していなかった重要な「死をめぐる自己啓発思想」がある。エリザベス・キューブラー＝ロスが「受容法」を提唱し始めたのと同時期の1960年代末、アメリカに誕生した「トランスパーソナル心理学」がそれである。⁴⁵

トランスパーソナル心理学を起ち上げた立役者アブラハム・マズロー (Abraham Harold Maslow, 1908-70)⁴⁶は、(フロイト流の)「人間の不幸の理由を探る心理学」ではなく、「人間が幸福になるための条件を探る心理学」を志し、そのような条件として「自己実現」があることを発見した人物として知られている。衣食住に事足りた上でさらに上位の幸福を手に入れるためには、自分が本当にやりたいことを全うし、自分の可能性を最大限に発揮することが肝要であって、そうした「自己実現」こそ人間幸福の究極の形であると考えたのである。しかしその後マズローは、1960年代のアメリカを席捲したニューエイジ思想の影響を受け、またカリフォルニアのエサレン研究所が先導した「ヒューマン・ポテンシャル運動」に加担した経験などを踏まえて、既に自己実現を成し遂げた人間がさらなる人間的成長を目指し、より大きな幸福を手に入れるためには、もう一つ別な条件が必要であることに気づく。無辺の空間と時間の広がりである宇宙の中にごくわずかな期間だけ存在する人間が真の幸福を掴めるかどうかは、そのごくわずかな期間に存在した

自分自身が、宇宙的観点から見て、必要不可欠なパーツであったと確信できるかどうかにかかっていることを見出すのだ。つまり、個々の人間を主体として考えるのではなく、人間を越えた宇宙的／超越的存在、すなわち「トランスパーソナル」な存在を主体として考え、個々の人間はその宇宙的／超越的存在から何らかの使命を受け、それを果たすために一時的にこの世に生まれたと考えることが人間に究極の幸福をもたらす、と結論づけるのである。かくして「自己実現」の先に「自己超越」があると考えたマズローは、同様の考えを持っていたスタニスラフ・グロフ (Stanislav Grof, 1931-) と共に、1969 年、「トランスパーソナル心理学会」を設立する。

このようにマズローは、そしてトランスパーソナル心理学は、「人間が幸福になる条件を探る」という学問的関心から出発して、「人間を越えた宇宙的／超越的存在との一体感を自覚することが、人間に究極の幸福をもたらす」という結論にたどり着いたわけだが、実はこの考え方は決してマズローの独創ではないし、彼が初めて明らかにしたものでもない。

例えば、前述した第 16 代ローマ皇帝マルクス・アウレリウスは、『自省録』の中に「君は全体の一部として存続してきた。君は自分を生んだものの中に消え去るであろう。というよりはむしろ変化によってその創造的理性の中に再び取りもどされるのでであろう」(54-5) と書き記しているが、ここで使われた「全体／創造的理性」という言葉が、人間を越えた叡智、すなわち超越的なものの謂いであることは明らかで、こうした文章の端々からも彼の「達観法的自己啓発思想」の根幹に超越的存在が意識されていたことは疑い得ない。また 19 世紀アメリカを代表する哲学者にして超絶主義の提唱者ラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) が、その代表的エッセイである「自然」(“Nature,” 1841) の中に「森のなかで、われわれは理性と信仰をとりもどす。そこにいれば、わたしは自分の人生に、自然がつぐなえないようなことは何ひとつ——どんな恥辱も、どんな災いも起こることはない(わたしに目だけは残してくれる)と感じる。むき出しの大地に立ち、——頭をさわやかな大気に洗われて、かぎりない空間のさなかに昂然ともたげれば、——いっさいの卑しい自己執着は消え失せる。私は一個の透明な眼球になる。いまやわたしは無、わたしにはいっさいが見え、『普遍者』の

流れがわたしの全身をめぐり、わたしは完全に神の一部だ」(42・3)と記した時、彼は間違いなく「自己超越」の感覚を抱いていたはずである。

それだけではない。カナダの精神科医リチャード・モーリス・バック (Richard Maurice Bucke, 1837-1902) が 1901 年に著した『宇宙意識』 (*Cosmic Consciousness*) は、天下の奇書であるにも拘わらず、アメリカのニューエイジ世代に多大なる影響を及ぼした本だが、この中でバックは「宇宙意識」との一体化によって人類は進化すると論じ、仏陀やイエス・キリスト、ダンテやウィリアム・ブレイク、そしてアメリカ詩人のウォルト・ホイットマンなどを「進化した人類の例」として挙げている。ここで彼の言う「宇宙意識」が、エマソンの言う「普遍者」と同じく、超越的存在を意味していることは言うまでもないだろう。また前述したアメリカ心理学の祖ウィリアム・ジェームズも、主著『宗教的経験の諸相』 (*The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*, 1902) の中で「宗教」の概念を定義し、「個々の人間が孤独の状態にあつて、いかなるものであれ神的存在と考えられるものと自分が関係していることを悟る場合だけに生じる感情、行為、経験」(52) であると述べていることからして、彼が「自己超越」を想定していたことは明らかである。加えて「集合的無意識」なるものを想定したカール・グスタフ・ユングも、当然、「個人を越えたもの」があると考えていたはずであり、となれば、ユングの影響下にあるすべての心理学系言説には、そのような超越者の存在が前提となっていることになる。

と、このように考えていけば、明確に「自己啓発」を謳っているか否かは別として、人間としてより良く生きるための指針となるような哲学的言説の多くが、突き詰めていけば、その根幹に「超越的存在への帰依」という側面を持っていることが分かる。事実、ソクラテスやラインホルド・ニーバー、ブラヴァツキー夫人やエドガー・ケイシー、エリザベス・キューブラー＝ロスやロバート・モンロー、さらにレイモンド・ムーディやイアン・ステイヴンソンに至るまで、本稿に登場したほとんどすべての「死をめぐる自己啓発思想」の担い手たちもまた、多かれ少なかれ、またそれを「神」と呼ぶか否かは問わず、個人を越えた宇宙的／超越的存在を想定していた。何となれば、もしも宇宙が過不足なく自足して永遠の時を刻んでいるのならば、ある

いは人間の魂が不滅であり、定期的にこの世に生まれ変わるのだとするならば、そうした仕組みを管理する主体が必要となるからであり、その場合、その主体は必ずや宇宙的／超越的な存在でなければならないからである。またそうした存在があるからこそ、人間は「死」という究極の難題をその存在に委ね、安んじて今生を生きることができるのだ。そのように考えれば、宇宙的／超越的存在の想定は、むしろ様々な「死をめぐる自己啓発思想」が長い時間をかけて築き上げてきた最終的な帰結と言うべきであって、トランスパーソナル心理学はその「帰結」に別ルートを使って一足飛びに到達したと見做すのが妥当であるように思われる。

その意味でトランスパーソナル心理学とは、ソクラテスやエピクロス以降の、あるいは死後生存の可能性が云々され始めた 19 世紀半ば以降の、種々様々な「死をめぐる自己啓発思想／本」を踏まえ、それらを総合した上で誕生した究極の「死をめぐる自己啓発思想」であり、死の恐怖を克服し、かつ、生を充実させることを促す「思想的妙手」なのである。いわば、これが「答え」なのだ。

『葉っぱのフレディ』

そしてトランスパーソナル心理学が提唱する「人間を超越する存在との一体感の自覚」という「答え」は、例えば『無境界』(*No Boundary: Eastern and Western Approaches to Personal Growth*, 1979) という本の中で、宇宙と自己の間にある「境界」を消すことを提唱したトランスパーソナル心理学系の論客にして自己啓発ライターのケン・ウィルバー (Kenneth Earl Wilber Junior, 1949-) などにも受け継がれ、今もなお有力な自己啓発思想となっている。

だが、ウィルバーのようなしめめらしい著述家を持ち出すまでもなく、実はこの「答え」をさりげなく我々に提示している世界的なベストセラー自己啓発本がある。アメリカの教育学者レオ・バスカーリアが書いたベストセラー、全世界で 1,800 万部を売り上げたという『葉っぱのフレディ —いのちの旅—』(Leo Buscaglia, *The Fall of Freddie The Leaf*, 1982) なる絵本がそれである。

この絵本の中で「フレディ」と名付けられた木の葉は、他の仲間の葉と共に春に生まれ、盛夏を謳歌するが、秋の到来と共に先輩の葉たちが一人また一人と落葉していくのを目撃し、いずれ自らの死が近いことを予期して恐怖する。しかし実際に落葉し、自分がその一部であった大木を見上げたフレディは、たとえ自分が死んだとしても、それは大自然の大きな生命のサイクルの一端に過ぎず、生まれる前にいた場所に戻っただけで、春になればまた別な形で新生するであろうことを悟り、安堵の眠りに就くところで幕を閉じる。

一見すると子供向けの絵本のような体裁をしているこの本であるが、個々の存在の死を、より大きな存在との一体感や、それに続く生まれ変わりの予感によって克服するという筋書きである点からして、これがトランスパーソナル心理学の知見を、そしてその前提となる種々様々な「死をめぐる自己啓発思想」の知見を、踏まえたものであることは疑いようもない。その見た目とは裏腹に、『葉っぱのフレディ』は、子供向けどころかむしろ大人向け、それも死期を悟って人生に言いようのない虚しさを感じ始めている老人を慰めるための絵本なのだ。

無論、『葉っぱのフレディ』はほんの一例に過ぎない。たとえ表向きはそのように見えなくとも、「死をめぐる自己啓発本」は、それぞれ多種多様な体裁を取りながら、既に我々を取り囲むように存在している。そしてそれらすべては、古代ギリシャ以来連綿と紡がれてきた人類の叡智を踏まえつつ、死の恐怖を遠ざけ、「今、ここ」を充足して生きる術を、我々に授けてくれているのである。

註

1. ウィキペディア「シャニダール洞窟」の項目を見よ。
2. エピクロス「メノイケウス宛の手紙」『エピクロス ―教説と手紙―』（ワイド版岩波文庫、2002年）所収。本文中の引用はこの版のものである。
3. 「フロー理論」については、M・チクセントミハイ『フロー体験 喜びの現象学』を、また「ポジティブ心理学」については、マーティン・セリグマン『オ

プティミストはなぜ成功するか』を参照せよ。

4. 「マインドフルネス」についてのオーソドックスな考え方については、ジョン・カバットジンの諸著作を参照せよ。ただし現在、マインドフルネスの概念は拡大解釈され、瞑想法の一種としてこれを扱う自己啓発本が多数出版されている。
5. マルクス・アウレーリウス『自省録』（岩波文庫、1956年）。本文中の引用はこの版のものである。
6. ウィキペディア「ニーバーの祈り」の項を参照せよ。
7. 映画『その男ゾルバ』を参照せよ。楽観主義のメリットを語る際にこの映画に触れる自己啓発本は多いが、註8に挙げるアーネスト・ベッカーの『死の拒絶』もその一つである。同書48-9頁を見よ。
8. アーネスト・ベッカーの死についての考察は、ベッカー『死の拒絶』第一部第二章「死の恐怖」及び第三章「精神分析の基本概念の再構成」、とりわけ56-7頁によく表れている。
9. プラトン『パイドン——魂について』を参照せよ。
10. エマニュエル・スウェーデンボルグについては、高橋和夫『スウェーデンボルグの思想 科学から神秘世界へ』が参考になる。
11. Catherine Crowe, *The Night-Side of Nature* (1848), (kindle edition). なお、クロウのこの本がイギリスの大衆に与えた影響については、デボラ・ブラム『幽霊を捕まえようとした科学者たち』28-31頁に詳しい。
12. 「ハイズヴィル事件」については、巽孝之『思い出のブックカフェ 巽孝之書評集成』219頁、及び稲垣伸一『スピリチュアル国家アメリカ』21-7頁を参照せよ。
13. 『幽霊を捕まえようとした科学者たち』36頁、及び『思い出のブックカフェ』219頁を参照せよ。
14. 『幽霊を捕まえようとした科学者たち』52頁。
15. 『幽霊を捕まえようとした科学者たち』39-40頁。
16. ただしロバート・ブラウニングは後にD・D・ヒュームの霊能力に疑念を抱き、後に彼を批判した詩「霊媒スラッジ氏」（“Mr. Sludge, “The Medium”）”を書いている。
17. 『幽霊を捕まえようとした科学者たち』53頁。

18. ブラヴァツキー夫人についての情報は、主として太田俊寛『現代オカルトの根源 —— 霊性進化論の光と闇』、及びウィキペディア「ヘレナ・P・ブラヴァツキー」「神智学」の項目に依った。
19. 心霊現象研究会がブラヴァツキー夫人の詐欺的行為を暴露した経緯については、『幽霊を捕まえようとした科学者たち』135-146 頁を見よ。
20. アニー・ベサントについては、ウィキペディア「アニー・ベサント」の項に拠った。
21. キャサリン・ティングリーについては、ウィキペディア「Katherine Tingley」の項、及び海野 弘『癒しとカルトの大地 神秘のカリフォルニア』第一章「サイキック・カリフォルニア」に拠った。
22. 『チベットの死者の書』やその英訳者ウォルター・エヴァンス＝ヴェンツ、及び本書のユングへの影響などについては、ちくま学芸文庫版『チベットの死者の書』の「文庫版解説」及び「参考」に詳しい。なお、ユングは 1935 年に出版された本書のドイツ語版に解説を書いているばかりか、「チベットの死者の書の心理学」(1935) や「チベットのたいなる解脱の書」(1939) (どちらも『東洋的瞑想の心理学』所収) をはじめ、一連の論文の中でこの本を論じている。
23. ルドルフ・シュタイナーの生涯及び業績については、西平 直『シュタイナー入門』を参照せよ。
24. イギリス及びアメリカにおける心霊現象研究協会の設立経緯に関しては、デボラ・ブラム『幽霊を捕まえようとした科学者たち』に拠った。
25. 「コティングリー妖精事件」の発端及び顛末、そしてアーサー・コナン・ドイルとの関連については、ジョー・クーパー『コティングリー妖精事件』に詳しい。
26. 引用の全文は以下の通りである：“But the War came, and when the War came it brought earnestness into all our souls and made us look more closely at our own beliefs and reassess their values. In the presence of an agonized world, hearing every day of the deaths of the flower of our race in the first promise of their unfulfilled youth, seeing around one the wives and mothers who had no clear conception whither their loved ones had gone to, I seemed suddenly to see that this subject with which I had so long dallied was not

merely a study of a force outside the rules of science, but that it was really something tremendous, a breaking down of the walls between two worlds problems, a direct undeniable message from beyond, a call of hope and of guidance to the human race at the time of its deepest affliction.” (Arthur Conan Doyle, *The New Revelation* (1918)、第一章)

文中の“the wives and mothers”とは、コナン・ドイル本人を指すと言ってもいいだろう。

27. これら個々のケースについては、『幽霊を捕まえようとした科学者たち』に拠った。
28. J・B・ラインの生涯と業績についてはステイシー・ホーン『超常現象を科学にした男 J・B・ラインの挑戦』に拠った。
29. LSDなどの薬物を使った「意識拡張」の問題については、尾崎俊介「自己啓発本として読む『ホール・アース・カタログ』『外国語研究』(第54号)を参照せよ。
30. 以下、エリザベス・キューブラー＝ロスとその業績についての情報は、主として本文において言及した彼女の著書、すなわち『死ぬ瞬間 死とその過程について』『死、それは成長の最終段階 続 死ぬ瞬間』『「死ぬ瞬間」と死後の生』『ライフ・レッスン』『死後の真実』に拠った。
31. 以下、ロバート・モンローについてとその業績についての情報は、主としてモンロー自身の書いた『ロバート・モンロー「体外への旅」』に拠った。
32. スウェーデンボルグが天界や地獄で見聞したことについては、『スウェーデンボルグの霊界日記』『天界と地獄』『天界と地獄』などを参照せよ。
33. オリヴァー・ロッジの息子レイモンドが語ったあの世の様子については、ロッジが書いた『レイモンド』を参照せよ。
34. 以下、レイモンド・ムーディとその業績についての情報は、主としてムーディ自身の書いた『かいまみた死後の世界』『続 かいまみた死後の世界』『光の彼方に』に拠った。ムーディが整理・分類した臨死体験の15項目については、『かいまみた死後の世界』31頁以下に詳しい。
35. アルバート・ハイムによる臨死体験報告は Russel Noyes, Jr. と Roy Kletti によって 1972 年に英訳され、“The Experience of Dying from Falls”として

Omega: Journal of Death and Dying 誌第 3 号、45-52 頁に掲載された。

36. ケネス・リング『いまわのきわに見る死の世界』175 頁を見よ。
37. イアン・スティーヴンソン『前世を記憶する子どもたち』第 2 章及び第 5 章を参照せよ。
38. イアン・スティーヴンソン『前世を記憶する子どもたち』51-2 頁。
39. ヒッピーたちの多くが『チベットの死者の書』を読んでいたことについては、ちくま学芸文庫版『チベットの死者の書』の「文庫版解説」に、訳者・川崎信定氏による興味深い報告がある。それによると、当時のヒッピーたちのグルの一人であったティモシー・リアリー (Timothy Francis Leary, 1920-96) も本書の愛読者であり、その影響もあって、本書はいわば「LSD による心の旅路の指南書」と見做されていたという。
40. エドガー・ケイシーについての情報は、主として光田秀『眠れる予言者 エドガー・ケイシー』、トマス・サグラー『永遠のエドガー・ケイシー』、ジナ・サーナミナラ『転生の秘密』に拠った。
41. ヴァージニア・タイ (ブライディ・マーフィー) についての情報は、主としてモーレー・バーンステイン『第二の記憶：前世を語る女ブライディ・マーフィ』に拠った。なお、本書の中でヴァージニア・タイは、プライバシー保護の観点から (?) 「ルース・シモンズ」 (Ruth Simmons) なる別名に変えられ、その出身地もコロラド州からアイオワ州に変えられている。
42. ジョージ・ギャラップ・ジュニア『死後の世界』(58-9 頁、103-5 頁、128-133 頁)、及びイアン・スティーヴンソン『前世を記憶する子どもたち』(52 頁) を参照せよ。
43. 以下、イアン・スティーヴンソンとその業績については『前世を記憶する子どもたち』に拠った。本文中に記した括弧内のページ数は本書のものである。
44. 飯田史彦の「ブレイクスルー思考」については、飯田史彦『[[完全版] 生きがいの創造』第 5 章を参照せよ。
45. トランスパーソナル心理学の概要については、主として諸富祥彦『トランスパーソナル心理学入門』、及びウィキペディア「トランスパーソナル心理学」の項を参照した。
46. アブラハム・マズローの思想については、主として本人の執筆した『[改訂新版]

人間性の心理学』と『完全なる人間』の二著、及びウィキペディア「アブラハム・マズロー」の項に拠った。またエサレン研究所やヒューマン・ポテンシャル運動との関わりについては、W・T・アンダーソン『エスリンとアメリカの覚醒』を参照した。

文献目録

アーネスト・ベッカー著 今 防人訳『死の拒絶』平凡社、1989年。

アーノルド・トインビー著 青柳晃一・上島健吉・戸田 基・橋口 稔訳『死について』筑摩書房、1972年。

A・H・マズロー著 小口忠彦訳『[改訂新版] 人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』産業能率大学出版部、1987年。

A・H・マズロー著 上田吉一訳『完全なる人間 魂のめざすもの【第2版】』誠真書房、1998年。

イアン・スティーヴンソン著 笠原敏雄訳『前世を記憶する子どもたち』日本教文社、1990年。

飯田史彦『[完全版] 生きがいの創造』PHP文庫、2012年。

稲垣伸一『スピリチュアル国家アメリカ』河出書房新社、2018年。

W・ジェイムズ著 梶田啓三郎訳『宗教的経験の諸相』（上・下）岩波文庫、1969／1970年。

W・T・アンダーソン著 伊藤 博訳『エスリンとアメリカの覚醒 人間の可能性への挑戦』誠信書房、1998年。

海野 弘『癒しとカルトの大地 神秘のカリフォルニア』グリーンアロー出版社、2001年。

エピクロス著 出 隆・岩崎允胤訳『エピクロス ―説教と手紙―』ワイド版岩波文庫、2002年。

エマヌエル・スウェーデンボルグ著 高橋和夫訳編『スウェーデンボルグの霊界日記 死後の世界の詳細報告書』たま出版、1992年。

E・スウェーデンボルグ著 宮崎伸治訳『天界と地獄』ミヤオビパブリッシング、

2012 年。

スエデン・ボルグ著 鈴木大拙訳『天界と地獄』講談社文芸文庫、2016 年。

E・キューブラー・ロス著 伊藤ちぐさ訳 阿部秀雄解説『死後の真実』日本教文社、1995 年。

E・キューブラー・ロス著 鈴木 晶訳『死ぬ瞬間 死とその過程について』中公文庫、2001 年。

E・キューブラー・ロス著 鈴木 晶訳『「死ぬ瞬間」と死後の生』中公文庫、2001 年。

E・キューブラー・ロス著 鈴木 晶訳『死、それは成長の最終段階 続 死ぬ瞬間』中公文庫、2001 年。

エリザベス・キューブラー・ロス／デーヴィッド・ケスラー著 上野圭一訳『ライフ・レッスン』角川文庫、2005 年。

太田俊寛『現代オカルトの根源 —— 霊性進化論の光と闇』ちくま新書、2013 年。

尾崎俊介「自己啓発本として読む『ホール・アース・カタログ』」『外国語研究』(第 54 号) (愛知教育大学外国語外国文学研究会)、2021 年。

オリヴァー・ロッジ著 野尻抱影訳『レイモンド 「死後の生存」はあるか』人間と歴史社、1991 年。

景戒編 原田敏明・高橋 貢訳『日本霊異記』平凡社ライブラリー、2000 年。

カーリス・オシス／エルレンドゥール・ハラルドソン著 笠原敏雄訳・解説『人は死ぬ時何を見るのか 臨死体験一〇〇〇人の証言』日本教文館、1991 年。

カール・ベッカー『死の体験 臨死現象の探求』法蔵館、1992 年。

C・G・ユング著 湯浅泰雄・黒木幹夫訳『東洋的瞑想の心理学』創元社、1983 年。

川崎信定訳『[原典訳] チベットの死者の書』ちくま学芸文庫、1993 年。

河邑厚徳・林 由香里著『チベットの死者の書 仏典に秘められた死と転生』日本放送出版協会、1993 年。

グレン・ウィリントン／ジュディ・ジョンストン著 飯田史彦翻訳・責任編集『生きる意味の探求 退行催眠が解明した人生の仕組み』徳間書店、1999 年。

ケネス・リング著 中村 定訳『いまわのきわに見る死の世界』講談社、1981 年。

ケネス・リング著 丹波哲郎訳『霊界探訪 人間は死んだらどうなるか』三笠書房、1986 年。

- ケネス・リング著 片山陽子訳『オメガ・プロジェクト UFO 遭遇と臨死体験の心理学』春秋社、1997 年。
- ケン・ウィルバー著 吉福伸逸訳『無境界 自己成長のセラピー論』平河出版社、1986 年。
- ジナ・サーミナラ著 多賀 瑛訳 光田 秀監修『[改訂新訳]転生の秘密』たま出版、2012 年。
- シャーリー・マクレーン著 山川紘矢・亜希子訳『ダンシング・イン・ザ・ライト 永遠の私をさがして』地湧社、1987 年。
- シャーリー・マクレーン著 山川紘矢・亜希子訳『アウト・オン・ア・リム』角川文庫、1999 年。
- ジョー・クーパー著 井村君江訳『コティングリー妖精事件』朝日新聞社、1999 年。
- ジョージ・ギャラップ・ジュニア著 丹波哲郎訳『死後の世界 人は死んだらどうなるか』三笠書房・知的生きかた文庫、1992 年。
- J・L・ホイットン他著 片桐すみ子訳『輪廻転生 驚くべき現代の神話』人文書院、1989 年。
- J・カバットジン著 春木 豊訳『マインドフルネス ストレス低減法』北大路書房、2007 年。
- ジョン・カバットジン著 松丸さとみ訳 田中麻里監訳『マインドフルネスを始めたあなたへ 毎日の生活でできる瞑想』星和書店、2012 年。
- ジョン・ホワイト著 石井朝子訳 吉福伸逸解説『死と友になる』春秋社、1990 年。
- ステイシー・ホーン著 ナカイサヤカ訳 石川幹人監修『超常現象を科学にした男 J・B・ラインの挑戦』紀伊国屋書店、2011 年。
- 高橋和夫『スウェーデンボルグの思想 科学から神秘世界へ』講談社現代新書、1995 年。
- 立花 隆『臨死体験』（上・下）文春文庫、2000 年。
- 巽 孝之『想い出のブックカフェ 巽孝之書評集成』研究社、2009 年。
- デボラ・ブラム著 鈴木 恵訳『幽霊を捕まえようとした科学者たち』文春文庫、2010 年。
- トマス・サグルー著 光田 秀訳『永遠のエドガー・ケイシー —20 世紀最大の予言者・感動の生涯』たま出版、1994 年。

西平 直『シュタイナー入門』講談社現代新書、1999 年。

バーバラ・ハリス著 立花 隆訳『バーバラ・ハリスの 臨死体験』講談社＋α 文庫、1998 年。

平田篤胤『仙境異聞・勝五郎再生記聞』岩波文庫、2000 年。

ブライアン・L・ワイズ著 山川紘矢・亜希子訳『前世療法 米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘』PHP 文庫、1996 年。

ブルース・グレイソン／チャールズ・P・フリン共編 笠原敏雄監訳『臨死体験 生と死の境界で人はなにを見るのか』春秋社、1991 年。

プラトン著 納富信留訳『パイドン ——魂について』光文社文庫、2019 年。

H・P・ブラヴァツキー著 ボリス・デ・ジルコフ編 老松克博訳『ベールをとった イシス第1巻 科学（上）』竜王文庫、2011 年。

H・P・ブラヴァツキー著 ボリス・デ・ジルコフ編 老松克博訳『ベールをとった イシス第1巻 科学（下）』竜王文庫、2015 年。

マイクル・B・セイボム著 笠原敏雄訳『「あの世」からの帰還 臨死体験の医学的研究』日本教文社、2005 年。

マーティン・セリグマン著 山村宜子訳『オプティミストはなぜ成功するか』パンローリング、2013 年。

マルクス・アウレーリウス著 神谷美恵子訳『自省録』岩波文庫、1956 年。

光田 秀『眠れる予言者 エドガー・ケイシー』総合法令、1998 年。

M・チクセントミハイ著 今村浩明訳『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社、1996 年。

モーリス・ローリングズ著 川口正吉訳『死の扉の彼方』第三文明社、1981 年。

モーレー・バーンステイン著 万沢 遼訳『第二の記憶：前世を語る女ブライディ・マーフィ』光文社、1959 年。

諸富祥彦『トランスパーソナル心理学入門 人生のメッセージを聴く』講談社現代新書、1999 年。

ラルフ・ウォルドー・エマソン著 酒本雅之訳『エマソン論文集』（上）岩波文庫、1972 年。

リチャード・モーリス・バック著 尾本憲昭訳『宇宙意識』ナチュラルスピリット、2004 年。

ルドルフ・シュタイナー著 西川隆範訳『輪廻転生とカルマ』白馬書房、1988 年。

レイモンド・A・ムーディ・Jr.著 中山義之訳『かいまみた死後の世界 よりすばらしい生のための福音の書!』評論社、1977 年。

レイモンド・A・ムーディ・Jr.著 駒谷昭子訳『続 かいまみた死後の世界』評論社、1989 年。

レイモンド・A・ムーディ・Jr.著 笠原敏雄・河口慶子訳『光の彼方に 死後の世界を垣間みた人々』TBS ブリタニカ、1990 年。

レオ・バスカーリア作 みらい なな訳『葉っぱのフレディーいのちの旅ー』童話屋、1998 年。

ロバート・モンロー著 川上友子訳 坂本政道監訳『ロバート・モンロー「体外への旅」』ハート出版、2007 年。

Z・リッチモンド K・リッチモンド共著 笠原敏雄訳『死後生存の証拠』技術出版、1990 年。

Arthur Conan Doyle, *The New Revelation* (1918), kindle edition.

Catherine Crowe, *The Night-Side of Nature; Or, Ghosts and Ghost-Seers* (1848), kindle edition.

Russel Noyes, Jr. and Roy Kletti, “The Experience of Dying from Falls” in *Omega: Journal of Death and Dying* (3), 45-52, 1972.

(ビデオ)

『その男ゾルバ』(20 世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン株式会社)

『晴れた日に永遠が見える』(パラマウント ホーム エンターテインメント ジャパン)

(付記：本研究は JSPS 科研費 JP20K00387 の助成を受けたものである)